

子ども学の源流を次世代につなぐ

# 幼児の教育

[特集] 保育の「根本考察」にチャレンジ!

幼小接続期の子どもと保育者・教師

[実践] こども園をつくる

大学の中に山ができた!

[実践] 私の保育ノート

保育の可視化がもたらす保護者の変容

2018

↓

2019

冬

since 1901

第118巻 第1号

お茶の水女子大学

『幼児の教育』編集委員会

## 保育ナビブック ※ 第9弾!

※保育ナビ（月刊保育誌）から生まれた新シリーズ。  
保育現場で気になるテーマをしっかりと掘り下げます。

# 若手保育者の 育成法

—組織の活性化は若手の成長がカギ！

若手保育者をどう育てるかは園の未来にかかわる重要な課題です。新人から3～5年目の保育者を育成するために必要な方法を、マンガを多く用いて、具体的に紹介します。

師岡 章／著（白梅学園大学）

全 80 ページ 26×18cm 定価 本体 1,800 円＋税  
109-82 ISBN978-4-577-81451-2

## 若手保育者の 育成法

—組織の活性化は若手の成長がカギ！

師岡 章（白梅学園大学）

新人・  
若手育成の  
ポイント  
満載

「マンガ」→「解説」→「シート」の  
3段階で見えてくる  
若手保育者育成の課題と解決のヒント！

## 「マンガ」→「解説」→「シート」の3段階で 見えてくる若手保育者育成の課題と解決のヒント！



不安・緊張・戸惑いを解消・希望に変えていく対応心がかる

### 新人育成の悩みどころ

一般企業では入社直後、先輩社員が新人を指導する。しかし、保育現場では、先輩社員が新人を指導する機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。新人は、先輩社員から指導を受ける機会が少ない。

## CONTENTS（一部抜粋）

### ●Chapter 1

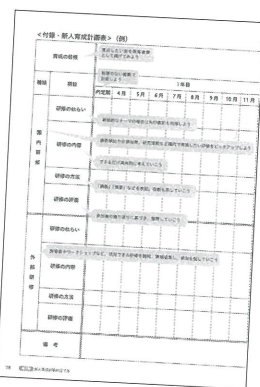
#### 新人・若手保育者の育成法

- ①新人保育者への接し方
- ②メンター制度の活用
- ③コーチング理論の応用
- ④事例検討のすすめ…など

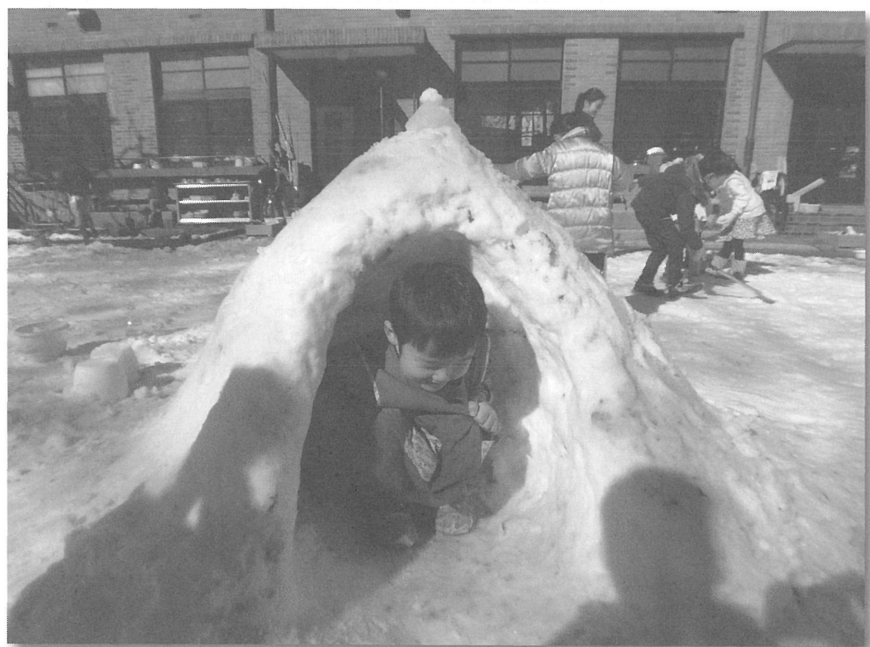
### ●Chapter 2

#### 働きやすい職場環境のつくり方

- ①同僚性の創出
- ②教職員の居場所づくり
- ③打ち上げのすすめ
- ④歓送迎会の進め方







「かまくら、  
つくったよ」

子どもの情景

写真

子どもの情景

1

目次 まど

保育者の重心

2

特集

保育の「根本考察」にチャレンジ！

8

幼小接続期の子どもと保育者・教師

4

《座談会 2018》

幼小接続期を考える

5

《アーカイブズ》

「幼児最初の学校生活」

—『幼児教育』第二十三巻第四号

(一九一三年)から—

15

実践

私の保育ノート

保育の可視化がもたらす保護者の変容

あらためて感じた、保護者と共に創つていく保育とは？

石井美和

22

実践ファイル

世界OMEF創設七十周年の年に寄せて

「第七十回プラハ大会報告」 上垣内伸子

26

こども園をつくる

—文京区立お茶の水女子大学こども園の

記録— Vol.11

大学の中に山ができた！

「出会いの中で物語が生まれる」

宮里咲美

30

連載

倉橋惣三との対話 ⑧

幼児期の「一人一人」と

社会性の成長について (3)

浜口順子

36



# 目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある  
ステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

## 視点

梅干し、らっきょう漬けを若い世代へ  
どう伝えるか

近藤みゆき

40

絵本で考えるデス・エデュケーション

木村敦子

44

## 文化

園文化をデザインする ⑧

作ってみよう、冬

葉っぱ・氷を使って

中村紘子

48

## 探究

公立図書館における児童図書館員の  
絵本に関する取り組みについて

渡邊はづき

60

## 目録

『幼児の教育』平成三十年 総目録

61

## 子ども学のひろば

イベント・メディア情報・

「ナーサリー」こぼれ話

読者投稿・編集後記 他

62

## 保育者の重心

まど

最近ヨーロッパのある幼稚園を訪ね、強く印象に残ったのは、腰高の戸棚に寄りかかって子どもたちの前に立つ先生の姿だ。日本では、壁などに半身をもたれかけさせている保育者をほとんど見ないということに気づかされた。何かに重心を預ける姿は、緊張とは逆の休息のポーズであり、日本の学校文化においては「不真面目」のイメージにすら結び付く。

学生時代、「保育技術」という授業で、当時幼稚園教諭でいらした堀合文子先生から、保育者の立ち方について教わったことがある。学生たちと一緒に並び、「足の爪先に少しだけ重心をかけて立つのです」と実演してくださった。そうすれば必要に応じて即座に歩みだせると。外から見てもその堀合先生の姿が特段前に傾いているというわけではなかった。子どもたちの様子を常に気を配り、すぐに気づいて、体全体でいつでも応答できるように構えているということなのであろう。

先日、イギリスのベテラン保育者に、子どもを体のどこで理解するのですか？ と聞いてみたら面白かった。マインド(頭)でもハートでもない、ベリー(お腹)だというのだ。体の重心で受けとめるという意味に受け取れた。(浜口)

特集

# 保育の「根本考察」

## にチャレンジ！ 8

今から約 1 世紀前、倉橋惣三が本誌にこう書いた。「根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉の處で動いて居る。(中略)——我國の幼稚園教育界は、こんな風にして一年々々過ぎて居るのではあるまいか。」(「斯くてまた暮れゆく」大正 5 年 12 月)…… 倉橋がもし今生きていたら、現代の幼児教育界をどう見るだろう。倉橋先生、私たち根本考察できていますか？

## 幼小接続期の子どもと 保育者・教師

「幼小接続ありき」ではなく、園生活から学校生活へと過ごす環境が激変する子どもの立場にまず近づいて、じっくり考えました。幼稚園や小学校で教員経験のある先生方が自ら接続期に直面して感じてきたこと、そこから垣間見える 6、7 歳の子どもたちの姿にアプローチします。

### CONTENTS

座談会 2018

幼小接続期を考える

アーカイブズ

「幼児最初の學校生活」

— 『幼児教育』 第 23 巻第 4 号 (1923 年) から —



## 幼小接続期を考える

永倉みゆき  
本田祐吾  
杉浦真紀子  
横井紘子  
浜口順子  
(司会)

浜口 皆さんこんにちは。今回の改訂で、幼稚園教育要領・保育所保育指針等に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が記され、小学校との連絡、連携が一層意識される内容になりました。今日は、幼児期と学童期入口の接続期をテーマに座談会を企画しました。お越しいただいたのは、目下、幼稚園、小学校の担任をされ、共通のお子さんをリレーで担当されたこともある杉浦先生、本田先生。横井先生は、幼稚園で担任をした経験もあり、

幼保小連携に関する著書があります。そして永倉先生は、幼稚園と小学校の両方で教員をされたことがありますね。今日は、幼児教育段階から小学校への移行を経験する子ども自身の立場になるべく近づいて、自由におしゃべりしたいなと思っています。よろしくお願ひします。

### 言葉掛けへの配慮

永倉 幼稚園を卒園した子どもが学校帰りに園に寄って、「先生がね、英語しゃべるからわからないんだよ」って言ったことがあったんです。先生が英語をしゃべるわけではないんだけど、高学年から降りてきた先生だと、使っている言葉がね、わからない。「起立」とか「礼」とか、そういう言葉ですから。「英語しゃべるから全然わからないんだよ」って怒るんです。

本田 それ、わかります。私、最初の一年生を担任した時は、六年生の後だったんですよ。

永倉みゆき（静岡県立大学短期大学部こども学科教授）  
杉浦真紀子（お茶の水女子大学附属幼稚園教諭）  
浜口順子（お茶の水女子大学教授）

本田祐吾（お茶の水女子大学附属小学校教諭）  
横井紘子（十文字学園女子大学人間生活学部  
幼児教育学科准教授）

永倉 それは大変でしたね

本田 そう、話すスピードが全然違います。

一同 あゝ。

本田 あと、使っている言葉が難し過ぎちゃうんですね。

永倉 そうです、そうです。

本田 低学年を多く受け持つ先生に、「つまり」「要するに」を絶対使うなど言われましたね。

永倉 「適当に」とかね。実習生もよく使うんですけど、これではわからないだろうなと思って。

本田 小学校の先生は、多分びつくりするくらい「つまり」と「要するに」を使っている気がしますね。

一同 あゝ。

永倉 オノマトペの研究をしている学生がいるのですが、体の動きを表現する「ぐるっと回って」というような言葉が、割と保育の中では使われます。小学校ってそういう言葉で

は言わないから、円形に広がってほしいときに「丸くなってください」とかって言われると子どもは、こうなっちゃう（頭を抱える）んですね。

一同 （笑）

永倉 そうというのが一年生の生活には、いっぱい詰まってる感じがする。

本田 さすがに丸くなっているのは見たことないけど、もし目の前にいたら「それもありだね！」って（笑）。逆に「なるほど！」って思います。私は、そういう言葉のズレがあるときは、使った後にその言葉を説明するとか、必要に応じてします。さっきの「つまり」も、使いたかったら教えればいいわけで、そうしながら少しずつお互いの文化が歩み寄るようなことを意識しています。

浜口 やっぱりそれって小学校的なのかな？  
杉浦先生、幼稚園ではどうでしょうか？

杉浦 みんなで話すときに、どの辺の言葉が





▲(左から) 本田祐吾氏・杉浦真紀子氏

この子どもたちと話すにはちょうどいい言葉なのかっていうことはやっぱり考えます。本田先生が言ったように、ちよつと難しく言い過ぎたかなって思うと反省するし、自分で言う方が難しくなってきたりいるなと思ったなら、もっと柔らかく、とか。今担任している三歳だと、「あ〜」とか「あちゃちゃ」とか、自分が幼児化していて。そういう私を年長さんが「へへへ」という顔で見ているのも感じます。本田先生もそんな感じですか？

**本田** やっぱり合わせるとのことなのだと思うのですが、ただ「小学校に来たぞー」という思いも子どものほうにはあるはずだから、背伸

びさせるとまでは言われないけれども、少し変化があってもいいかもしれないと思いますね。

## 一年生の新しい体験

**永倉** ちようど五歳児を卒園させた後で、一年生を担任した経験があるんですけど、信じられないくらい子どもは小学校に上がるということを自分の励みにして、留学みたいな感じで、頑張ろうと思って来るんです。それは幼稚園に入るときとは全然違います。幼稚園はみんな間違いなく遊びに来るんだけど、小学校は勉強しようと思って来ているから、それを援助するというのはとても大事です。そこで遊んでばかりいたら、子どもはがっかりしますから。

以前、本田先生の授業で、子どもが一生懸命言葉にするのを、先生が真剣に、誠実に、一緒に考えてくれる場面を、素晴らしいなあ

と思って見ていました。でも、そういう先生が少なく感じます。割と自分の枠があつてそれに入れる感じが多いかな。また、私は幼稚園がベースだったので、小学校で子どもが全員こつちを向いて座っているのが、すごく気持ち悪い感じだった。小学校に入学すると、机が皆、前を向いて並んでいるんですけど、私は早いうちからグループで座る形にしちゃったんですよ。そうしたら同僚の先生から

「信じられない、そんなことすると不安で授業できないわ」って言われたの。やっぱり小学校の先生がもっている子どもとつながっている、という体の感覚とは違っているように思います。保育では、こちらを向いて座っていないながらもつながっている感覚ってありますよね。その中間みたいなのが多分接続期。子どもは両方ちゃんとわかつて使い分けて、だんだん小学校のやり方というのがわかつてくるので、大人はそこを理解した上で教えて

いくのが重要なって。

**横井** 大学の授業

で幼保小連携の話

をしていたとき、

ある学生が、小学

校では先生にあて

られないとしゃべ

ってはいけなくな

る、と言ったんですね。幼稚園では、集まる

時間や場所はあっても、「先生、先生」って子

どもが前に出ていくことが自然だったりする。

もちろん「ちよつと座って」っていうときは

あるにしろ、それはルールとしてはそこまで

厳密じゃない。小学校はそれが暗黙のルール

なのでしょうか？ 最初にルールとしてしつ

かりお約束するのですか？

**本田** 学校はきっちりありますね。私はあま

りやりませんが、普通はもうきっちり。先生



▲(左から) 横井紘子氏・永倉みゆき氏



によつては筆箱を置く位置まで決めますからね。あとよくあるのは、声の大きさの物差しが教室にバンと貼つてあつたりします。

**横井** 声の大きさをチャネルのように？

**本田** 今は「2」の声でしゃべろうとか、アリの声とか、象の声とか。

**永倉** 幼稚園から小学校に行つて一番びつくりしたのが、廊下にね、「廊下を走るな」って書いてあるわけ、字で。でも読めないわけよね、小学校一年生だと。それで、走るなって書いてある所を走ると怒られる。小学校って基本、言葉の文化なんですよね。「ちゃんとやったでしょ」とか。子どものほうも意見を言わないとだめなんですよね。言うとか書くとかできないと、「頑張ろう」って言われちゃうので。幼稚園では話せることが前提にはならないので、先生が聞き取ろうとする気持ちのほうが強い。

冗談ではなくて、私は最初の頃、小学校つ

て修行させる場なんだって思いました。廊下は走れと言わんばかりの環境なんですよ、そもそも。けどそこに「走つてはいけない」って書いてある。学校は意識で体の動きを止めるということをやらせる所なのかと思ひました。幼稚園では感じた通り動くと「すてきね」って言われてたのに、それを学校でやると、「ここでやっちゃいけないよ」とか「今はやるときじゃない」とか「時間を見て」とか、いろいろ考へて行動することが求められちゃう、そんな感じがしました。

**浜口** 子どもは小学校を楽しみに、ちよつと違う世界に行くと思つて来るから、そういう新しいことが起こるのがね、うれしい面もあるかもしれない。でもだんだん慣れてくると無理が来ちゃう。お茶大附属では「なめらかな接続と適度な段差」とよく言いますが、いろんなルールがあるっていうのは「適度な段差」ですね。珍しくて面白がついているうちは

いいけれど、なんかちよつとずつ無理が来てしまふのは問題なんでしょうね。

### 大正時代の幼小接続と比べて

**浜口** 幼小接続に係るアーカイブズ記事として、今回、山内俊次氏の大正末（一九二三年）の「幼児最初の學校生活」（この後の15～21ページに転載）を皆さんにも読んでいただきましたが、この山内さんという方は約百年前の附属小学校の先生、本田先生の先輩にあたります。

**永倉** 文中「四」の初めの「私の学級に於ては、多少新らしい試みとして……」のところ、「即ち一斉教授といふことを少くして個別指導といふものに力をつくしてゐることなどもその中の一つであります」と書いてあるんですけど、必ずしも幼稚園は個別な活動ばかりではないし、一斉の授業でもすごく自由感がある先生もいらつしやる。

**浜口** 今は、個別指導 vs 一斉授業という単純な対比では語りにくくなっているかも。

**本田** その前の「三」では、体を横にしないと机の間を通れないということとか、子どもたちが規則正しく同じ方向を向いて「一壇と高い所に教師が」いることとか、教壇がある当時の教室の様子を暗に批判している。やっぱり、大正自由教育の時代は、教壇を廃するというところがあった。その中で個々に応じうる。つまり、一斉指導というのは、みんなで同じ時に同じものを注入するというシステムだった。

**永倉** 生活科ができた頃に私は小学校に戻ったんですけど、ある先生が「まさか、みんなで朝顔なんかまいていないでしょうね？」と言うんですよ。「今はもう、生活科の時代ですから、一人ひとり好きなものをやるようにしなきゃいけない」みたいに言うんだけど、私、それは違うと思って。同じ朝顔であつても、

かわり方が違うっていうのが子ども。

**浜口** 一人ひとり違うことをやるのがいい、  
とも言切れない？

**永倉** そうそう。そういうことじゃないです  
よね、幼稚園って。そこがうまく表現できれ  
ばいいなと思いながらここを読んだんです。  
だからそういうふうに関別vs一斉と対比させ  
て捉える先生たちは、生活科が始まってびっ  
くりしたと思う。「生活科って、何教えればい  
いんだ？」と。「幼稚園みたいに、みんなばら  
ばらにやる方がいいんだ」みたいに考えて。  
でもそれはちよつと違う。

**横井** 「教室の何れの部分へでも、各自腰掛ば  
かりを携へて自由に集合して、其日経験した  
ことどもを各児話しあひ」の部分、十数年  
前に私が見た附属小学校の授業内容と近いな  
と。今「主体的・対話的で深い学び」がキーワ  
ードになって、大学では方法としてアクティ  
ブ・ラーニングなどと言われますが、対話が

できないグループでアクティブ・ラーニング  
をやらせるほど無意味なことはないというか。  
学びにならないね、と先生たちとも話してい  
ます。幼稚園、小学校の先生のお話でもあつ  
たように、子どもたち同士で言いあえる関係、  
ぶつかりあえる関係、その日あったことを気  
軽に話せる関係ができていないと、グループ  
活動は学びになっていかないということを、  
大学の授業でも実感しているところですよ。  
こですよね。机が  
一人一個与えられ  
て常に前を向いて  
ちゃんと座ってい  
て、先生にあてら  
れて初めて発言し  
たり、「いいです」  
「だめです」とい  
った決まったセリ  
フだけ言ったりす



るのではない、対話ができる場所をちゃんと確保しておくことが、この時から大切に考えられていたことに意味があるなつて。

**本田** 私が思う小学校の問題点は、教える側の平等であつて学ぶ側の平等にはなつていないことだと思うんです。決められた内容をこなさなくてはいけないという問題もあります。が、そのために、ここまでは教えたから後はできないのはあなたの責任、となつてしまい、できないことを積み残して進級してしまう。以前、公立の小学校でも、計画表を使って個別の学習に取り組んだのですが、最後に子どもにアンケートを取ったら、「みんなでやる普通の授業（一斉授業）は、話を聞いていても聞いてなくても先に進む。だけど、個別の学習は自分がやらないと終わらない」とありました。

**浜口** それ、何年生の子どもですか？

**本田** 六年です。卒業の時に書いてもらった

アンケートにありました。もう一つ、別の子を書いていたのは、自分が得意だと思うものはさつと進んで、苦手なものにはすごく時間をかけられるとありました。

**浜口** なるほど。本来そうあつてほしい。

**本田** それが、子ども同士の人間関係にとつても、すごく意味のあることになりました。個々で進める中で、できない子を責めるのではなく、助けあいながら一緒にできるようにするような関係性になっていました。それが安全、安心にもつながってくると思います。山内先生も、そういうことをすごく大事にされている。山内先生、算数の先生なんです。すごく柔らかな実践をされていて、昭和二年の『児童教育』（戦前から続くお茶大附属小学校の研究誌）の中でも、表したいことを文字だけでなく、絵とかいろいろな形で表現することをすごく大事にして実践されているんですよ。それがどういうふうに進んでいった

かつていう記録も残っていて。先生がすごく柔らかいのを感じます。

**永倉** この時代の「一斉教授」って、今よりもっと……。

**本田** がちつとしている。だからその対比の意識がすごく強いんだろうというのと、子どもが「今したい」というその必要性とか重要性をすごく大事にしようっていうところとか。そういうところはすごく強調されているんですよね。

**杉浦** 接続期の研究で、幼稚園はこれまで子どもたちを送る側の立場で言ってきたけれども、入ってくる側をどう受けとめていくのかということであらためて考えているところで。今、二歳児の様子を観察に行ったり、三歳児を入園させる保護者はどう思っているのかなと探ったりし始めていて、子どもたちを受け入れていく、そういう立場になってみるというところから研究を始めています。

タイムリーにこのアーカイブズ記事を読んだときに、小学校の先生、昔の方だけでも、家庭背景が違ってとか、幼稚園にちよつと行った人もいるとか、そういうことを思いながらちゃんと一人ひとりっていうふうに考えているっていうことが、本当に私はうれしい。私たち幼稚園でもそれを踏まえて一人ひとり見ているとはいえ、多少乱暴なところがあつたんじゃないかな。自分たちに合わせて待たせたりするようなこととか……。もつとなめらかに、家庭から来た人たちが幼稚園で安心して生活できるために、冗談で「最初だけ半分ずつ交代で登園するのでもいいかもね」なんて話も最近することがあつて。本当に、一人ひとりについていうことがどういうことなのか、今あらためて考えているところだったので、これを読んで自分でも考えるきっかけが得られました。小学校のように、受け入れるということを学ぶことも大事だなんて思いました。

浜口 山内氏の記事の時代は、就園率7%とか今と比べようもないぐらい少なかった。家庭からたくさん来るし。

杉浦 最近、保育所から来る人もいる。

浜口 多様化ですね。

本田 共働き率は上がっていますか？

杉浦 上がってきてますよね。子育ての支援という課題も当然あるので、幼稚園としてもそこを文京区の子育て施設とかに学びに行ったりしています。(続く)

(二〇一八年八月七日)



幼児最初の學校生活

東京女子高師訓導

山内俊次

—『幼児教育』第二十三卷第四号

(一九二三年) から —

(弊誌は、第十九卷第一号から第二十三卷第六号まで『幼児教育』でした。)

私は、昨年四月以来尋常科第一学年児童三十名(男女各十五名)を担当いたしました。丁度一ヶ年どうやら過ぎた訳であります。今日静かにふりかへつて見ますと、誠に思ひなかなものが多々あるので、実に汗顔の至りであります。

はじめ、私の最も留意いたしました事は、外でもありません。児童の幼稚園乃至は家庭

生活から學校生活への過渡期を如何に取扱ふべきかといふ問題でありました。

この問題は私にとつては相當に難問題でありました。抑々學校生活の最初の一步は、彼等の全生涯から見ての一大変化であつて、而も極めて急劇な変化であります。従つてこれがかよはき幼児の身心に及ぼす影響たるや決して輕々しく見る事が出来ない。況んや彼等身心發育の方面から見ても極めてその旺盛な時期であると同時に、統計上罹病率といふもの、甚だ高い時期であることは、一入注意を要する問題であるからであります。

最も新入児童の中には、それらの幼稚園生活をして来たものがあります。これは家庭生活から直ちに學校生活へ這入るものに比して割合にその変化の程度は少なからうと思はれます。故に全部の児童が幼稚園生活をして来た場合は、これは甚だ好都合であつたらうと思はれます。何故ならば、幼稚園生活は、



丁度家庭生活と学校生活との中間生活としても見得る点があるからであります。この意味に於ても、私共は今日の幼児教育といふものの普及を一層發達せしむべく乞願ふ次第であります。

然るに私の学級児童について見るに、その過半は依然家庭生活から直ちに学校生活へと這入つたものであります。最もその家庭生活の良否といふことは別問題といたしまして、大部分の児童がそれでありますからその点には少からず考慮したのであります。少数であつても、兎も角幼稚園生活を終へて来たものもあります。ですから、これを亦度外視する訳にも行きません。従つて三十名の児童の個々について各々異つた事情のあることは、私共も少からず考慮を要する点であつたのであります。

## 二

未だ全く無経験であるべき学校生活といふ

ものに対する新入児童の予期といふものは果してどんなものでありませうか。どうもそれらに対しては一般家庭に於て妥当な取扱ひのしてないものが多いではないかと思ひます。徒らに大人の考を以て学校へ行つたらばあ、しなければならぬ、こうしてはならぬなどと、未だ児童の必要にも迫らざることにまで及んで彼此と我が子を思ふのあまりにやかましくいはれた子供は果してその入学当初を幸福ならしめる所以でありませうか。私共は實際さういふ風にして来た児童をまのあたり見るにつけてもその決してほめるべきことでないことを痛切に思ふのであります。むしろ家庭に於ける本来の子供らしい他所行きでない、ありのまゝの子供の方が自然であり、幸福であることを熟々思ふたのであります。これがそもく学校生活に入るのスタートを健全ならしむべく大切なことだと思ひました。

さてかくして学校生活に入つたものに対し

ては、先づ以て彼等の社会的生活の益々拡張されたことを新らしい喜びとして感ぜしめねばならぬ。彼等と教師との心の接触をいひしれぬなつかしみとして感ぜしめねばならぬ。学校の所謂校規いわゆるともいふべきもので律しやうとするが如きことことは、幼児最初の学校生活に對しては無用のことであると信ずるのであります。多人数団体生活による必要に迫られて規約も構成し創造していつたらよからう。

今まであまりに時間的に規律立つた生活に経験の乏しい幼児に對して、鐘の合図で教室に入り、四十分か四十五分で、更に鐘の合図で運動場に出る、かくして毎時の終始を鐘の合図によらねばならぬといふことは、幼児最初の学校生活としては、少々適切を欠きはせぬか。私はこんな考へから、随分大胆に第一期の殆んど大部分を、合図の鐘を度外視して進みました。

第一時間割表といふものを、厳肅に定めな

いで、極めて大体の予定を教師の方丈け定めておいた訳であります。そして時間的には極めて自由を与へて見たのであります。だから学校といふ所は鐘の合図で教室の出入をするものだといふ様な感じはもたしめなかつたのであります。

だから教授時間といつても教師のお話から初まつて、途中順次に変じ、それがやがて自然動作を伴つて遂には唱歌遊戲となりなどすることもあり。絵雑誌を登校時挙こつて見ることから、一人その画の説明を教師に對してするものがあると、又二人三人、それが段々全体に對しての説明となり、遂には話し方、聴き方の練習になることもある。或る時は図画に於てその経験を記憶によつて発表することから、その説明となり、多数の成績を陳列しては相互に批評せしめるといふ様にして、一連続の作業を終るや、教師児童打うちつて屋外に出で、自由遊戲から、団体遊戲に変化する

こともあり、団体遊戯から各自の思ひ思ひの遊戯になることもあります。かくして適當の機会に又教室に入るといふ様な状態であつたのであります。

或は思ふ人があるであらせう。それでは如何にも最初の學校生活が放縱と選ぶ所がなからうと。生きた教師はそこに常に侶伴者として彼等の登校時から下校時まである以上、さうした杞憂は一としてあるべき筈はないのであります。そしてその間に相當の課程をも終らねばならぬし、學校生活の第一歩をして健全に且つ意義あらしめねばならぬ。かくして、各個人の傾向といふものを正確に査定してそれに適應した指導をしなければならぬ。初学年兒童のかうした取扱に於て教師の任務の愈々重且大なることを思はねばならぬのであります。

### 三

私の学級は矢張り四間と五間の部屋であり

ますがそれでも兒童数が三十人であるし、大テーブル五脚あつて、それに三十人の子供が夫々分れてゐるのですから、つまり一脚のテーブルに六人の子供が向き合つて腰かけてゐる訳です。そしてお互に睦じく話しながら、夫々の作業をするのであります。彼等が彼等の作業を余念なくする間に彼等同志に睦じく話しをすることは極めてナチュラルなことであつて、又極めて麗しいことである。従来教授時間とし云へば、極めて静肅であることを予想する様なことのあつたのは何たる不自然なことであらせう。かくては尊き生命を有する兒童を人としないで物として取扱つた様なものではありますまいか。

學校へ入学すると彼等が家庭生活に於ては到底經驗し得ざることに多く遭遇するであらせう。それは外でもありません。先づ一人机か二人机によつて。四角な広い教室へ、隅から隅までぎつしりならべられた机にとつか

ねばならぬことであります。

その机間といへども時に体を横にせねば通られないといふ学校も今日尚少くないのであります。かくの如きことは、今日の経済状態に於ては容易に解決のつき兼ねることながら、果して幼児最初の学校生活に於てよい影響を与へるものであらうかどうか。私は前から度々申して参りました様に、学齢に達した児童が学校に這入って多数の友だちを得ることにより、彼等のやがて社会生活への第一歩となす所に、大いに意義あることは認める。然しなから、教室の隅から隅まで机で以て埋められた中に、各児が規則正しくその場を定められ、一壇と高い所に教師がいかに構へ、前に教卓を据え、鞭を打振りながら壇上に活躍するのは教師その人のみであるといふことは、何たる教師本意のことでありませう。未だ学校生活の何物たるかをもわきまへない幼児最初の取扱ひに於てかゝる方法をとるとするな

ら、あまりにしのびないことでありますと思ひます。

今日一学級の児童数なるべく少くすることは理想としつゝ、一面又已むを得ずこれを実行し得ないといふことは遺憾千万なことだと思ひます。せめてもその取扱ひに於ては、特に幼児最初の学校生活に於ては、かくも狭苦しい部屋にのみ閉ぢこもらないでよろしくオープンエーヤで以て教授を進めて行きたいと思ひます。狭苦しい部屋でなければならぬといふ理由がどこにありますか。

それらの点から申しますと私の学級の如きは、或は理想に近い程かとも思はれます。時には教室の何れの部分へでも、各自腰掛ばかりを携へて自由に集合して、其日経験した子どもを各児話しあひ、その機会に於て児童の現在の生活に即した、生きた修身教授になることもある。彼等の共同製作の様なものを教室の一方には広く場をとつて列べることも

出来る。一方には書籍棚をそなへて。適當な読物を多くそなへおき、各児の必要に応じて自由にこれを読むの設備も裕に出来てゐるといふ様なことは、幼児最初の学校生活に於て少からず有効なことで子供の<sup>ため</sup>に如何にも幸福なことであつたかの様に思はれます。

#### 四

私の学級に於ては、多少新しい試みとして従来の学級教授と異つたことをもやつてゐます。即ち一斉教授といふことを少くして個別指導といふものに力をつくしてゐることなどもその中の一つであります。従つて、必要に応じて、時には一時的に席を定めることもないではありませんが、平生に於ては、テーブルが五脚あるだけで、何処<sup>どこ</sup>でもかまはない。自習時間の如きは書棚の前に書物を見るものもあれば、窓際の棚の上で絵を描くものもある。テーブルについてしきりと何か綴り居るものもあれば、折紙の飛行機<sup>さかん</sup>を盛につくつて

ゐるものもある。さうかと思へば数名のものが計算カードによつて計算練習の競争をやつてゐるものもあるし、窓下で運動に余念のないものもある。かゝる自由作業の間にも常に、彼等の幼稚ながらの計画目的に対して兎も角、それを遂行しなければ止まないといふ様に訓練したいと考へてゐました。そしてそれを無理に押売りに幼児に要求することは夢々したくない。自然の間に子供らしいさうした態度を養ひたいと考へてゐました。

やつと今日ふりかへつて見る時に、多少その点丈は大いに見るべきものがあつた様に思ひます。学級全体を通じてその学習態度なるものは実に喜ばしき傾向が芽ざしてゐることを認めるのであります。けれどもこれが、果して持続するものかどうかわかりません。唯返す返すも遺憾であつたことは、私が最初大いに計画しやうとしたことの多くは遂ひに思ふ様に実行出来なかつたことであります。

## 五

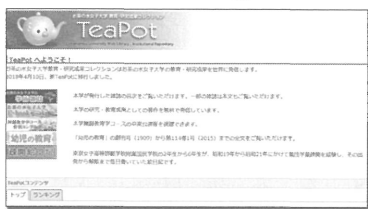
私の幼児最初の学校生活に対して、今日まで実際と<sup>きた</sup>り来<sup>きた</sup>った方針は、大体に於て今少し幼稚園生活的ならしめたことであります。これが家庭生活から学校生活への急変を幾分なりとも緩和することであり、幼稚園から来た者に対しては、その幼稚園生活の延長とも見ることが出来ませう。然しながら茲<sup>ここ</sup>に一言したいことは、かうした取扱ひは、必ずしも現行の教科課程を軽減して教授の効果を低下せしむる所以でないといふことであります。幼児最初の学校生活をより幸福ならしむべく努むることは、むしろ彼等将来への学習能力を一層高むる所以であることを深く信じて疑はないのであります。

\*本文の旧漢字を新漢字に直した以外は原文のまま掲載しています。なお適宜ルビを振りました。(編集部)

### 幼児の教育 バックナンバーを WEBページで公開中

「幼児の教育 TeaPot」で

検 索



お茶の水女子大学 教育・研究成果コレクションTeaPot  
<https://teapot.lib.ocha.ac.jp/> の中にあります。

明治34年発行の創刊号から、現在、平成27年発行の  
 第114巻第1号までご覧になれます。

# 私の 保育ノート

## 保育の可視化がもたらす保護者の変容

あらためて感じた、保護者と共に創っていく保育とは？

石井美和

(幼稚園教諭)

私は、遊びを中心とした保育を行いながら大学院に通い、大学時代より関心の強かった保護者支援についての研究を行った。内容は、三歳児の保護者五名を対象に、遊びを中心とした保育の中で、保護者は「遊びへの理解」「子どもへの理解」において、一年間どのような気づきや葛藤を経験しているのか、心の変容を可視化したものである。

この研究を行った経緯として、まずは、保護者支援の一環として保護者に対し子どもの姿や遊びについて発信を多く行っているという実

感をもつことが少なかったということ。次に、園からのいろいろな発信ツールはあるものの、子どもの姿や子どもが興味をもっていることなどの発信がどうしても事後報告になってしまっていたということである。そこで、よりリアルタイムに子どもの姿を発信し、保護者の「遊びへの理解」「子どもへの理解」を深めていくツールはないかと考え、新たに写真中心のドキュメンテーションを導入し、その記事の中に保護者のコメント欄を含め作成した。

石井美和（いしい みわ）

港北幼稚園（横浜市都筑区）教諭。6年目。

2016年4月玉川大学大学院入学。2018年3月卒業。



## ドキュメンテーションによる保育の可視化

保護者へのインタビュを重ねていく中で、浮き彫りになっていったことは、「保育が見えにくい」ということであった。これまであらゆるツールを介して保護者に子どもの姿を伝えてきたつもりであったが、園でのわが子の姿を理解していくことは困難なことであることがわかった。保護者と共に子どもたちの姿を共有し、子どもの世界の面白さや成長を共有していきたいという思いで取り組んでいたが、実際の「見えにくさ」という壁は思っていた以上に大きいものであった。

しかし、ドキュメンテーション導入後より、保護者からさまざまな声が挙がってきた。「家でやり始めていたのはこの記事のことだったのですね」「最近、〇〇に興味が出てきたようです」「試行錯誤できる遊びって大切です

ね」などと、記事とわが子の姿をリンクさせ、リアルタイムに子どもたちの興味関心に触れ、少しずつ保護者側にも気づきが生まれるようになっていった。

今まで月に一度、月末に発行していたお便りでは、説明するために文字が多くなっていたが、ドキュメンテーションは、写真がその場の雰囲気や状態を表しており、文字で説明する必要性が自然と減っていたことに気がついた。さらに、研究を通して、ドキュメンテーションのプラスの効果や影響力は、個々の保護者の子ども観にも影響を与え、遊びの中のわが子の成長を実感する重要なツールであることも示唆された。

### 保護者と共に保育を創るきっかけ

現在、私は四歳児の担任をしているが、保育をしている中で、再びドキュメンテーション

ンの影響力を感じることがあった。

五月頃から年中の子どもたちが絵の具や、色の混ざりに興味をもっていたことや、同じタイミングでおたまじゃくしを育てていたことから、子どもたちと相談して、こいのぼりならぬ「おたまのぼり」を製作する機会があった。以降、子どもたちの色への興味は継続的に広がりを見せ、絵の具だけではなく、自然物から取れる色を楽しむことや、身近な草花に触れる機会をつくっていった。

子どもたちにとっては、身近な草花としてツツジが人気で、実際にツツジの花で色水遊びも展開されていた。しかし、子どもたちと花を採りに行ったり、担任も集めて持ってきたりする分量では、数が足りず困っていた。そこで、ツツジ染めを行っている子ども写真を中心に、「保護者に向けてツツジ大募集！」と表題を入れたドキュメンテーションを作成してみることにした。二、三日たって

もあまり反応がなく、やはり難しいか、と感じていた頃、一週間ほどたち、ツツジをいっぱい詰め込んだ袋を握って登園する子どもたちが少しずつ現れた。さらには「逆に、白いツツジはどうなりますかね？」と白いツツジを持ってきてくださる保護者の姿もあった。

その頃、父母参観の行事が近づいており、保護者にこれまで子どもたちが楽しんできた草花染めを、子どもたちと同じ目線で、見たり体験したりしてもらえる機会にしたいと考え、素材の募集を行った。草花染めで使用している実際の草花や道具の種類、さらには染め終えた作品の写真など、何回かに分けてドキュメンテーションを作成し、随時、素材となる草花を募集していった。すると、次々と自宅にある生花が幼稚園に届くようになり、素材が豊かになっていった。保育参観当日は、白地のエコバッグやハンカチ、さらには家族おそろいのTシャツ、ワンピースな

ども持参して、親子で草花染めに夢中になる姿が見られた。

### 保護者と共に保育理解を深める

私は、日々の保育の中で、子どもたちと一緒に草花に目を向け、子どもの声を聞いていく中で、実際の保育の中で生まれる気づきや驚きを、楽しんできた。しかし、今回の保育参観までの過程や当日の様子から、このような活動は担任と子どもたちだけで創ってきたものではなく、そこに至るまでに、子どもの姿を理解し、実際に子どもとかわってくれた保護者の方々の存在があったからこそだということに気づかされた。自然と保護者も一緒にしながら、いろいろな草花に目を向け、子どもたちのためにと保育で使える素材を持参し、参加していく様子があったことにとっても驚いた。私はドキュメンテーション

と出会い、少しずつ保育を開いてみたことで、こんなにも保護者の方々が、保育を創り上げていく一員として重要な存在であることをあらためて実感することとなった。

そもそも保育での発信の意図として、保護者から「遊びへの理解」「子どもへの理解」を得るためのものと考えていたが、発信は一方通行ではなく、保護者と保育者が共に情報を共有できているかがとても大きな鍵になると感じるようになった。共に子どもの育ちを大切にしていきたいというまなざしをもつことができれば自然と理解が深まっていくのではないかと考えた。今後も、保護者の方々と一緒に、保育の世界、子どもの世界を楽しんでいけるよう、ドキュメンテーションをはじめとした発信方法を模索していきたい。

## 世界OMEPP創設七十周年の年に寄せて 第七十回プラハ大会報告

上垣内伸子

(大学教員)

### OMEPPのこれまでの歩み

去る六月二十五日から二十九日までの五日間、チェコ共和国の首都プラハにて、OMEPP世界大会が開催されました。一九四八年に創設されたOMEPPにとって二〇一八年は特別な年、そしてプラハは記念すべき第一回の会議を開いた特別な場所。七十周年を皆で祝おうと、世界七十三か国のOMEPP加盟国から、たくさんのメンバーがプラハに集まりました。そして一九六八年に正式加盟した日本にとっても、今年は五十周年のお祝いの年です。学期中にもかかわらず五十名を超える会員が参加しました。

OMEPP（世界幼児教育・保育機構）は、第二次世界大戦終了直後の一九四五年九月に開かれたヨーロッパ戦災孤児救済会議に参加した人たちによって構想構されました。一方、一九四六年には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ憲章を掲げて、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が創設されました。このユネスコの教育部門に就学前教育を含めるべきとの思

上垣内伸子（かみがいち のぶこ）

十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科教授。

OMEPP 日本委員会副会長。

いを抱いたイギリスのアレン卿夫人は、スウェーデンのミュールダール夫人らと就学前教育に関する世界組織の結成を検討する会議を開き、就学前教育の国際組織として協働活動が可能なることをユネスコ本部に伝え、一九四八年プラハにて第一回世界大会を開催しました。こうしてOME Pは発足したのです。幼児教育分野の知恵と実践を国際化することが人類の平和の礎となる、皆で平和の種を幼児の心にまこうというのが、OME Pが一貫してもち続けている願いです。現在では、七十三か国が加盟し、毎年世界大会が開催され、保育関係者の交流が図られています。

日本では、山下俊郎日本保育学会会長（当時）を委員長に、日本保育学会、国公立の幼稚園と保育所の団体、保育者養成校の団体など国内の代表的な保育関連団体が集めた強力な組織を組んで加盟申請を行い、一九六八

年の第十二回ワシントン大会で正式加盟が承認されました。その後、荏司雅子第三代保育学会会長の時代に、国際交流に積極的に参加する意思をもつ個人会員の参加を可能にする組織改革を行い、団体会員と個人会員による組織に変わりました。現在は、十一団体と二四〇余名の個人会員が活動しています。

## 第七十回プラハ大会

七十周年記念式典は、第一回大会と同じく、カレル大学のカロリナムという歴史的会堂で行われました。カレル大学は一三四八年創立の東ヨーロッパ最古の大学であり、チェコは、『大教授学』を著し、



▲カレル大学での70周年記念式典

幼児期の教育の重要性を説いたコメニウス生誕の国です。チェコの幼稚園は *Materske Skoly* (母親学校) と称されますが、これはコメニウスの言葉です。中世から続く知の系譜に触れたような気持ちになりました。

今大会テーマは「今日の幼児教育に必要なもの、持続可能な未来にとつての基礎」。歴史の中に今を捉え、持続可能な社会の構築に向けて未来を語りあう場であろうとする開催国の意図が感じられました。五名が登壇した基調講演では、平和を希求して発足して七十年を経た今も、子どもが安心して暮らせる平和な社会が実現していないこと、むしろ、地域によっては紛争や貧困状態の厳しさが増し、不安の中での生活を迫られていること、物質的には豊かであっても十分に愛されているとは限らないこと、何より、子どもらしく十分に遊ぶ権利が保障されていない子どもが多く存在することが語られ、今こそ、幼児教育に

かわる私たちが、やるべきことを行動に移そうと呼びかけられました。<sup>※2</sup>それは、現在の OMEP の目的の第一に掲げられている、「すべての子どもの質の高い幼児教育・保育の保障」に留まるのではなく、国連が掲げた持続可能な開発目標 (SDGs) の中の目標 17「目標を達成するためのパートナーシップ」に関連する事項を指すものでした。子どもも大人と同様に、社会変革、未来構築の主体としての権利が尊重されるべきであり、そうした主体として行動していくための価値や態度を身につけていくために、幼児教育には今以上に積極的に果たす役割があるということです。

人類全体、地球全体が生き方を再考すべき時期に、OMEP もまた新たな挑戦を始める時にあるのだと、中世の歴史ある建築物に囲まれたプラハの地で、これからの未来のことを思い描きながら過ごしました。

## これからのOMEPPの活動

世界OMEPPでは、これまでの資料をデータ化してデジタルアーカイブにまとめました。七十周年記念誌として、History Bookと、各国の子どもの遊びと保育を紹介したPhoto Book、幼児教育用語辞典が作られています。また、各国からの保育実践の提案のための雑誌“Theory into Practice”も発刊しました。いずれもダウンロード可能です。

OMEPP日本委員会では、二〇一九年九月五～七日に京都市で開催する「OMEPPアジア太平洋地域大会」(APR 2019 in KYOTO)の準備中です。歴史や自然文化に共通する点をもつアジア太平洋地域の加盟十一か国(と地域)の会員が、「保育の質」をテーマに集います。来年二月に大会サイトオープン<sup>注4</sup>の予定です。

ぜひ一度、OMEPPのウェブサイトをのぞいてみてください。そして、京都での大会で各国の保育者との交流に加わっていただけるとうれしく思います。

### 注(参考資料)

- 1 『わが国の幼児教育・保育と国際交流—OMEPP日本委員会40年の軌跡—』OMEPP日本委員会 二〇一二年
- 2 「OMEPPニュース」二〇一八年第二号  
世界OMEPPウェブサイト  
<http://www.worldomepp.org/>
- 3 OMEPP日本委員会公式ウェブサイトを  
<http://www.gakkaiaac/omeppjp/>

\* OMEPP(オメップ)は、フランス語の  
Organisation Mondiale pour l'Education  
Précolaireの頭文字を取った呼称。



リポート

# こども園をつくる

—文京区立お茶の水女子大学こども園の記録—

## Vol.11／大学の中に山ができた！

～ 出会いの中で物語が生まれる ～

宮里暁美



### 理想を抱き、語ることの意味

幼児期の教育は環境による教育です。「環境」には、物的環境と人的環境があり、子どもたちが出会うすべてのものを「環境」と呼ぶことができます。しかし、もう少し限定して環境を捉えたとしたら、それは「場」と言い換えることができるように思います。子どもたちが過ごす場所としての環境です。今回は、「場」に限定した環境について考えてみたいと思います。

本園には狭く平坦な園庭しかありません。子どもたちが過ごす場所として、それはとても貧弱なものに思えました。さまざまな遊びを誘発し体の諸機能を発達させることができる場所に必要な要素（広さ・高低差・隠れる場所・木立・自然との出会い）に欠けているのです。このような環境の中でより良い保育は可能なのだろうか、という問いが重くのしかかってきました。

宮里暁美（みやさと あけみ）

お茶の水女子大学文教育学部子ども学コース教授。  
文京区立お茶の水女子大学こども園園長。

しかし、新しくこども園を構想する際に、私たちが繰り返し語りあったことは「理想」でした。どのような保育を行いたいのか、子どもたちとつくり上げたい遊びや生活はどのようなものか等々、最も大切な根本の思いを確かめあいました。準備が進み、敷地面積が狭いなど厳しい現実が見えてきたときでもなお、私たちは理想について考えることをやめませんでした。それは次のようなものでした。

- ①大学キャンパスは変化に富んだ豊かな自然と出会うことができる。本館中庭は園庭として整備。講義の妨げにならないように〇二歳児中心に使用しよう。新装なった学生会館前のスペース（通称「広場」）も園庭として整備。ダイナミックな活動を展開できる。三〜五歳児はここを拠点としよう。
- ②その場所が子どもにとって居心地が良く、遊びの場となるためには、穴を掘る、実を集める、入り込むなど、手を加えられることが大切。遊びが豊かになるためには、高

低差や明暗、入り組んだ道など、変化に富んだ空間が欲しい。

- ③キャンパス全体地図を把握し、通行等において注意を要する場所を確認する。出合いが子どもの中に蓄えられ、つながりをもち、深まっていくように、「マップ記録」を積み重ね、自然（樹木・実・花・小さな生き物・四季の変化）の情報を収集しよう。

子どもたちの生き生きした遊びに必要な要素として「高低差」や「自然」「入り込み、手を加えられること」がありました。大学生が過ごす場所として整備されているキャンパスで果たしてそれらのことを実現できるのか、何もわからない状態でこども園はスタートしました。

そして開園から二年目の冬に、広場に大きな山を作ることができたのです。それは、夢のような出来事でした。今思うことは「理想を掲げること」の意味です。そこから始まることがある、と確信しています。

## 山誕生の物語

①残土発見の奇跡―専門家がそこにいたから  
平成二十九年十二月十一日、仙田孝先生(鶴見大学短期大学部)と鮫島良一先生(同)が来園されました。子どもの遊び環境研究の専門家である両先生からアドバイスを頂ける機会なので、園内だけでなく大学キャンパス内も案内することになりました。

子どもたちがよく遊んでいる広場に到着し、普段の遊びの様子を話しつつ、いつかはここに山を作りたいという夢を話しました。「山はいいですね」「池もあるともっといいね」と会話が弾み、「そういえば、あの奥の方に、いい樹があるんですよ。遠回りだけれど見ていきますか」と聞くと、二人は笑顔でうなずきました。そして、この寄り道が、残土との出会いをもたらしたのです。

廃材置き場なので掘り出し物が見つかるから時々見に行くんですよと笑いながら道を進

み、「ほら、立派な樹でしょ。目立たない場所にあるから、時々見てあげないともったいないんです」と紹介し、みんなで樹を見上げました。そのまま視線を移したとき、そこになると、大きな土山があったのです。え？ 何これ？ と見ていると、仙田先生たちが言いました。「きつと工事の残土です」「お願いします、もらえるかもしれませんよ」「捨てられてしまうから、急いだほうがいいですよ」と。その日のうちに施設課に連絡すると、事はトントントン拍子に進んでいきました。



▲記念すべき瞬間。こんなところに土の山。

## ②土山ができた!

十二月十五日、残土との出会いから五日目に、土山は誕生しました。

トラックが二十回以上も往復し土が運ばれます。見守る子どもたちの目にはシヨベルカーやトラックがまるでヒーローのように映ったのではないのでしょうか。

すべてを取り仕切ってくれた現場監督のHさんは、子どもたちが歓声を上げる様子をうれしそうに見てくださり、「ただ土を置いていくだけじゃ、つまらないでしょ」と、頂のような場所を作ってくれました。

土を置く位置を打ちあわせる  
ときから、「うち  
の孫もちょうど  
同じくらいなん



▲子どもたちが見守る中、残土が運ばれる。

## ③それからの日々

だよね」「子どもは遊びが大事だね」と話してくれたHさんとの出会いが、山に人肌のよ  
うな温かさを加えてくれたように思います。  
その後も大学内の工事に従事していたHさんは、  
山のそばを通るときにはいつも歩みを止めて  
笑顔を向けてくれ、子どもたちや保育者たち  
も、「Hさん」と呼びかけあつたのでした。



広場に着くと山へと一目散に駆け出す子どもたち。みんな山が大好きです。大学附属のいずみナ  
ーサリーの子ども  
たちもたくましく  
登ってきます。普  
段、附属幼稚園の  
お山を登って遊ん  
でいるので実力満  
点なのでした。

## ～山のそばで過ごす日々～



▲雨上がりには大きな水たまりができる。まるで池のようになりました。



▲粘土質の土は粘りが強く、泥団子作りに最適。土の違いで色合いが変わることに気づき、友達と比べあっています。



▲山のそばにロープ遊具。お父さんたちの力を借りて設置。バランスをとって進みます。



▲広場に小屋ができた！ 用務員の杉浦さんとお父さんたちが力を合わせて。ペンキ塗りは子どもたちも手伝いました。



◀登ったり、走ったり、滑ったり、大好きな山で、この日はアート。山に大きな布をかぶせ、色を付けていく。ローラーを両手に持ってコロコロと、山の上をお散歩。いつもよりも、山のでこぼこを感じながら歩く。端から端まで行ってみる。気づいたら、山にも色を付けていた！

## 夢が広がる「広場」

子どもの遊びを支える環境には「自然スペース」「オープンスペース」「道スペース」「アーキースペース」「アジトスペース」「遊具スペース」が必要であると、仙田満氏は言っています（『こどものあそび環境』筑摩書房一九八四年）。本園の広場には、もともと「自然」「オープン」「道」の三つがありました。そこに山ができ、ロープ遊具や小屋が加わったことで、あとの三つの要素も加わり、さまざまな動きが引き出され、可能性が広がってきているように思います。

残土発見のときにその活用方法をアドバイスしてくれた子どもの遊び環境研究者、土を運ぶ際に子どもたちのことを思い描き、すてきな山型にしてくれた工事現場の監督、小屋や畑作りを進めてくれた保護者や用務主事、そして、広場を共に愛し活用しているいずみナーサリーの先生たち、元気いっぱい遊ぶ

子どもたち等、多くの人とのかわりの中で「広場」は豊かに熟成しています。それはこれからも続いていくことと思います。本園のつながる保育は、このような営みの中で実現していくと確信しています。

＊連載を終えるにあたって＊

「こども園をつくる」として、文京区立お茶の水女子大学こども園の記録を十一回にわたり連載しました。区と大学が協働でこども園をつくるという日本初の取り組みについて、立ち上げの経緯、開園当初の混乱や学びについて報告しました。さらに、乳児保育やインクルーシブな保育、食育や子育て支援、教育時間外の保育等、認定こども園ならではのテーマについて報告しました。本園の小さな歩みを記録する機会を頂いたことに感謝し、これから一歩ずつ歩みを重ねていきたいと思っています。お読みいただいた皆様ありがとうございます。

――終わり――

## 倉橋惣三との対話⑧

## 幼児期の「二人一人」と社会性の成長について(3)

浜口順子

(大学教員)

子どもを「一人一人」として見るには

倉橋先生、子どもを「一人一人」として見るには具体的にどうしたらいいのでしょうか。その子一人だけをただじっと見ることでないことはわかってきました。前回、子ども一人一人は教育の責任単位である、「しかして教育の方法対象は群（グループ）」であると書かれた先生の「就学前の教育」（一九三二年）の一節を引きましたが、それはつまり、生活さながらであることが保育（幼児教育）の基本なのだから、一人一人を、周りの人やモノとの関係性の中でどう在るのかを見るということなのだろうと考え始めています。

倉橋先生は「一人一人」という表現を、戦前も戦後も大切に一貫して使われています。「一人一人」とは心理学的な個性という意味だけでなく、人間の尊厳として動かせない価値があることを示す言葉だと言えるでしょう。また戦後の先生の文章には、さらに、人間が有する一人一人の人權を真摯に捉え、戦後日本の民主的権利の思想を光としようとする息吹が感じられます。本誌一九五二年三月号の「保育の対象は幼児一人々々にある」という論考から、考えてみたいと思い



ます。

一人々々を貴ぶというのは、基本人權の眞の尊重でもある。それなければ、人權の所在に眞に忠なりといえない。しかし、こゝでいうのは、心理的に方法の正しきを得るためと、人權的に個の確立のためとだけのことではない。寧ろ、もつと実体的に個体的に、日々の實際保育の対象としてゝある。……保育が集団を対象とするということも、一人々々の保育のための方法的対象として集団生活を必要としていることで、集団が保育関心の究極対象ではない。一人々々を離れて人間愛の眞実はなく、人間愛の結合なくして、保育の眞実はない。愛ほど一人々々に切実でなければならぬものはない。一人々々への切実に総和はあつても、一人々々への切実は決して、総和の部分ではない。

（『幼児の教育』第五十一卷第三号 p. 2）

「ケンリ」という言葉を知っていても、ただ理屈で論じているだけでは「切実な」一人一人への関係性（「愛」と表現されている）なしの保育が独り歩きする危うさがある。倉橋先生は、当時の（そして今もある）ケンリでわかつたふうになりそうな世の中の風潮への違和感も表明されたのではないだろうか。私はここで、マザー・テレサがたびたび語ったこと——集団や社会という人間集団を助けることはできない、具体的に手を差し伸べられるのは、最も身近にいる家族や隣人だけだという意味のことを思い出します。

## 子どもをあらかじめ評価の対象にしないこと

一人々々を保育するということは、一人々々を孤独におくことでは決してない。たゞ、一人々々を社会の中に埋没しないことである。社会の中に一人をも見失わないことである。……方法的に個性保育である前に、又、観念的に個人保育である前に、めい／＼をめい／＼として愛し、めい／＼をめい／＼として憂うるこそ保育の真のこゝろである。(中略)

一人々々という以上、関心は各の子らに平均でなければならぬ。しかし、保育者の心のもち方としては、そうした、見失われ易い子、極言すれば、好ましくないような気もする子らに、注意と愛情のより多い傾倒が行われる時こそ、一人を見逃さない実際になり得るのである。

(同 p.p. 2-3)

人が一人一人に対して平等に(先生は「平均で」と言われています)関心をもたねばならないとは理屈ではわかっていても、実際問題としては困難なことであつて、特に、教育において「目立つものに目をつける」傾向があると、倉橋先生はさりとて言います。「本来において結果を求めることでもある教育において、よきものに目のつくのは自然でもある。健康児・優秀児が教育者の目につくのは自然である。或はまた、わが教育を遂げ易からしめると思われる柔順児の好ましいのも自然である。」と、「……自然である」を何回もつなげて、教育にかかわる大人のまなざしが偏見から逃れにくいことを警告する。そして、「更に、幼稚園などにおいて、美容の子が教師に好ましいのも、一つの自然でもある」と、苦笑したくなる教師の「自然」にも触れ、外見にすらとらわれやすい大人のまなざしの落とし穴を言い当てています。

一人々々とは、一人をも見失わないことであると共と、保育の対象として予め評価しないことである。  
(同 p. 3)

子どもにとって、生活さながらは「自然」であることが重要ですが、教育の場では大人が自然に身を任せると、得てして子ども一人一人が見えない状態に陥る——この矛盾をどう捉えるかがとても難しいことのように思われます。日々、子どもたち一人一人との関係がどうであったかを省察し、子どもの生活が充実していたか、そのために私は何ができたか、もっとできることはなかったかを振り返り、また新たに一人一人が見え始めるような保育の構えを用意すること。そのような省察によって、子どもを見る大人の目を曇らせてしまう「自然」に気づき、子どもとの関係を見直し、謙虚に保育を立て直すのだと思います。

Plan - Do - Check - Act を繰り返すことで工業製品の出来栄をチェックしては生産工程を修正するPDCAサイクルという用語がありますが、最近、幼児教育の世界でもこの言葉がよく使われるようになりました。PDCAにおける「C」チェックとは、本来、保育者の省察とはまったく出自の異なる概念なのです。ある理想像（完成モデル）へと子どもが近づかないから省察するわけではありません。工業製品がもし「一つ一つ」ユニークさを発揮していたらそれで欠陥商品になってしまいますが、保育の中では、子ども一人一人がそれぞれ特別な存在として尊重されるこそが大切に、そのようなになっているかどうか、大人は繰り返しセルフ・チェックしなくてはならないと言えるでしょう。

# 梅干し、らっきょう漬けを若い世代へどう伝えるか

近藤みゆき

(大学教員)

私は大学の食物学科を卒業し、管理栄養士の資格をもっています。卒業後三十年以上、現在の職場である短期大学で栄養士を志す学生の調理実習を担当しています。

## 玄米菜食との出会い

私は学生時代から「無農薬」の食材や「玄米菜食」に関心があり、結婚して二人目の子どもを授かった頃から地元の有機野菜を取り寄せていました。三人目を授かる前に「自然食品」の店で「野菜だけの料理」の掲載された本を見つけました。家に帰り早速作ってみると、昆布だしとしょうゆで煮た大根は思い

のほかおいしくびっくりしました。それまでは「野菜をおいしくするには肉か魚の助けが必要だが、なんとか野菜だけでおいしく食べることとはできないものか」と思っていたので、目からうろこが落ちる思いでした。昆布だしは野菜の持ち味を引き立てます。また、それまで何も考えずにむいていた大根やにんじんの皮も全部丸ごと使うのです。確かに「とう立ち」した野菜は皮が硬くなりますが、そのような野菜は市場にはまず出ません。米も「丸ごと」食べるということとで玄米です。動物性の食材はかなり少ない頻度で食べるようになりました。玄米菜食で生理はかなり軽くなり

近藤みゆき（こんどう みゆき）

名古屋文理大学短期大学部食物栄養学科准教授。

専門：調理学、調理科学。近隣の幼稚園への学生の出張食育講座、短大での子ども料理教室開催にかかわる。

ましたが三人目を授かりました。三人目出産後の育児休暇を利用し、生後間もない息子を連れて毎月、大阪の「正食協会」へ玄米菜食の料理法を習いに通いました。ここで野菜をはじめとする植物性の食材のいろいろな調理法を学びました。

## 短期大学での調理実習

自分の家では玄米菜食をしながら、仕事でそれを実践することはできません。玄米菜食は日本の昔からの食事方式でありながら、現代では主流ではないのです。それでも、大阪で学んだ野菜の使い方は調理実習に取り入れて実践しています。「野菜の皮はどうしてもむく必要があるときだけむく」「むいた皮を利用してもう一品作る」などです。例えば大根の皮はきんぴらや漬物、片栗粉をまぶしてから揚げにします。正月料理で飾り切りにした里芋の皮は、他の野菜の切り端と一緒にか

き揚げにします。里芋の皮も食べることができ、多くの学生は驚きます。また、かき揚げの衣は卵を使わず、小麦粉の水どきです。卵を使わないことで野菜の味が生きます。

家庭ではだしの素やコンソメを使う学生も多いのですが、学校では必要に応じて昆布だし、かつおと昆布の混合だし、食材のもつ旨みによるだしなどを使い分けています。素材からのだしだけでは物足りなく「コンソメが欲しい」という学生もいます。「塩味を上手に調えると旨みが強く感じられるよ」「味の相乗効果だったね」と伝えると、味を上手に調えて「本当だ」と喜んでいきます。

## 最近の調理実習での取り組み

五年くらい前から調理実習のすき間時間に「梅干し」「梅ジュース」「らっきょう漬け」「酢しょうが」「金山寺味噌」などの手作り体験を取り入れています。

「梅干し」では、一キログラムの梅を各班に百グラムくらいずつ配り、洗って水気を取りへたを取ってもらい、クラス分をまとめます。伝統的な方法ではないのですが、ビニール袋を使う方法で漬け込み、今後学生が家でも取り組みやすいようにしています。

「らっきょう漬け」「酢しょうが」は、「市販ルーを使わないカレーライス」「押しずし」にそれぞれ添えます。「金山寺味噌」はきゅうりといただきます。これらは短期間で食することができるので、実習で使う一、二週間前に「〇〇のとき使うよ」と伝えます。これら日本の加工食品は、学生の祖父母世代には家庭で作ることも多かったのですが、親世代ではほとんど作られていません。市販品は加工や保存のために食品添加物も多く、従来の自然な味わいを大切にしてほしいという思いもあります。

## ゼミでの取り組み

短期大学の選択科目で「ゼミナール」があり、少人数の学生が教員のもとで課題研究に取り組みます。私は「日本の伝統食品・発酵食品」ということで、「味噌」「甘酒」「酒かす」「お茶」などをテーマにしてみました。

数年前に「甘酒」「味噌」と、二年間発酵食品に取り組んだ熱心な学生がいました。彼女が行った学生に対するアンケート調査によると、伝統的な加工食品は、「納豆」「梅干し」「らっきょう漬け」の順に高い頻度で食されていました。また、「甘酒」を食べたことのある学生は六割で、そのうち九割が「そのまま食べる」でした。「酒かす」は三割の学生に食体験があり、食べ方は「かす漬け」「かす汁」がそれぞれ四割前後という結果でした。

今年度、私は学生と共に「漬物」に取り組んでいます。漬物は「香の物」とも呼ばれ、

料理の締めとなる大切な存在です。塩分の過剰摂取が生活習慣病を引き起こすということで敬遠されがちですが、乳酸菌発酵による風味豊かな漬物を学生と共に考案しています。漬物も大切にしたいものです。

## おわりに

二十歳少し前の、近い将来、食生活の作り手となる可能性の高い学生が、多くの調理体験、日本の伝統食品・発酵食品を作る体験をすることは大切なことかなと思います、この仕事を続けています。今後の課題は、手作りした「梅干し」や「らっきょう漬け」をそのまま食べるほかに調理にどう使っていくかです。学生にレポート課題を課して若い世代のアイデアを教えてもらおうかと思っています。

## 余談

園児への玄米菜食の導入として、ご存じの

方も多いかもしれませんが、福岡市の高取保育園は「玄米和食」を提供し、望ましい食習慣を身につける方針です。生活面では、お昼ご飯の「米とぎ」「食べた後の「茶わん洗い」、昼食後の「床拭き掃除」「園庭の掃除」などが日課です。子どもが小さい頃、こんな保育園にわが子を預けたいと思い、近くにないかと探したものです。名古屋にはこの園ほどではないけれど、かなり食事に力を入れている保育園もあります。

保育園や幼稚園の時期に、食事を大切に考える取り組みが、より広がってほしいと考えています。

# 絵本で考えるデス・エデュケーション

木村敦子

(大学院生)

人生の旅において人はさまざまな出会い、そしてまた、自然、絵画、音楽、本などに心揺さぶられる経験がありましよう。

私は、死生学者であるアルフォンス・デーケン氏のアシスタントを長らく務めてきました。死生学とは、文字通り「死」と「生」を、医学、文学、歴史学など多角的な観点から研究する学問のことです。その死生学を基礎とした教育が、デス・エデュケーションです。教育の範囲は、「いのち」の始まりから終わり、死別による悲嘆からの立ち直りを含む、広く深いものです。死を見つめることを通して、どう生きるかを考え、いのちの大切さを学ぶ

教育です。

## 絵本との出会い

子どもに死を教えようと考えるとき、どうすればよいだろうか、と戸惑われるのではないだろうか。

災害や事故による死者のニュース、近親者やペットの死など、死は身近にあります。子どもに「死ってなあに？」と問われるときが必ずあると思われます。そして、そのときこそ、死を教えるよい教育の機会であり、問われたときに話をそらすと、子どもは死について二度と口に出さず、タブーな言葉だと知る、

木村敦子（きむら あつこ）  
 広島大学大学院文学研究科人文学専攻。上智大学名誉教授 Alfons Deeken 元アシスタント。定年退職後、お茶の水女子大学 ECCELL 社会人プログラムで学ぶ。



とデーケンは説いています<sup>注1</sup>。しかしながら、子どもが問いを発するまで、準備して待つのはなかなか難しいように思われます。もっと自然な形でいのちの終わりを子どもに伝える方法はないでしょうか。

そのようなことを考えていたときに会ったのが、ドイツの絵本<sup>まづ</sup>『はちみつ色くんといし色おじさん』（筆者訳）でした。主人公の僕は、いつも一緒に遊んでくれる大好きな親戚のおじさんが病気になり、もうすぐ死ぬと知らされます。「死ってなあに?」「死んだらどうなるの?」と尋ね、もはやおじさんには会えなくなり、壊れたおもちゃのように動けなくなることをなんとか理解します。そして、おじさんが亡くなった後、天国での再会の希望を抱きつつ、おじさんとの楽しかった遊びを思い出す、というお話です。この絵本の登場人物は、楕円、四角などの抽象形で表現され、顔はなく、単純な線で動きや感情を表し

ています。また、主人公の僕は「蜂蜜色」、おじさんは「石灰岩色」、その他、青空色、芝生色、深紅色など、各々の色がもつイメージを使って、人物が豊かに描かれています。

このように多彩な色とシンプルな形を用いた絵本でドイツでは子どもに死を教えていることに私は驚かされました。確かに、抽象的に表現されていても、子どもは、読むときの情緒的な状況に応じてイメージを膨らませ、言葉を超えて理解していくのでしょうか。死を子どもに教えるとき、絵本を読み聞かせて、話しあうのはとてもよい方法だと気づかされました。

### 絵本に描かれている死

では、日本の絵本ではどのように死を表現しているのでしょうか。

登場人物はたいいていの場合、動物などを擬人化して語られることが多いです。それは、

子どもが絵に敏感に反応し、また影響を受けやすいことから、人の顔と比べ、より表情の少ない動物を主人公にすることで、子どもが自由に想像力を働かせ、感情を吐露できるように配慮されているからだと考えられます。

死の表現としては、葬儀、埋葬、お墓を描写することで、主人公の死を表しています。あるいは、挿絵では死について何も描かず、これまで登場していた人物や動物が、ページをめくると存在しないことで表されていることもあります。最近の絵本では、ユーモラスなお化けや天使の姿で死者が語るような場面もあります。

描写の方法として、死と共に、別離の悲しみ、その喪失の悲しみからの立ち直りの過程をあわせて表現されていることが多いです。また、死を描く前に、病氣、衰弱した様子、老いなどを描くことによって、死に向かっていることを自然に導いている場合もあります。

どの絵本にも共通しているのは、死を怖がらせるような表現や、痛みを感じさせるような描写はなく、温かな視点で描かれ、いのちの尊さを感じさせる終わりへと、明るい希望を予感させる結びの言葉で書かれていることです。このように子どもに不安感や恐怖を与えないように配慮された絵本を用いれば、子どもに優しく死を教えることができるようになります。

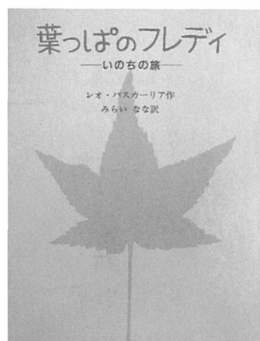
## 絵本の選び方

ハンガリーの心理学者マリア・ナギーによると、三歳から十歳までの子どもの死生観についての研究<sup>（註）</sup>によると、三歳から五歳までの子どもは、死を取り返しのつかない現象としては捉えることができず、死んだペットと、電池切れで動かなくなったおもちゃとを同じような感覚で受けとめるそうです。五歳から九歳頃になると、一度死んだらもう決して生き

返ることはないという認識は出てきますが、まだ、自分の身近な人が亡くなる、すべての人に死が降り掛かるものだと、認められないようです。十歳を過ぎる頃になると、ようやく死についての概念を理解できるようになるそうです。このように子どもの死についての認識は年齢によって異なるので、理解に応じた絵本選びが必要でしょう。

幼児の日常生活は、自然とのふれあい、動植物などのかかわりが深いため、いのちの存在を知る機会に満ちています。自然は、季節と共に変化し、姿や形を変えていきます。そのいのちが生まれ、育ち、変化していくさまを味わいながら、いつか終わりが来ることを、大人は視野に入れてしっかりと、子どもたちに絵本を通じて伝えてほしいと思います。今の季節、外には葉をすっかり落とし、まるで眠っているかのように見える木々があります。絵本『葉っぱのフレディ』（レオ・バスカ

ーリア作 みらいなな訳 童話屋 一九九八年）と一緒に読みながら、死について話すのよい機会ではないでしょうか。今生きていることの素晴らしさ、いのちの大切さを感じられることでしょう。



#### 注

- 1 アルフォンス・デーケン『死とどう向き合うか』NHK出版 二〇一一年 p. 238
- 2 Heinrichsdorf, P. (1995). Honiggelb und Steingrau, Gerstenberg Verlag.
- 3 Nagy, M. (1948). The child's theories concerning death. Journal of genetic Psychology, 73. 3-27

# 園文化をデザインする ⑧ 作ってみよう、冬

葉っぱ・氷を  
使って

(木育インストラクター)

中村紘子

園にある見えるもの、見えないもの。子どもの体いつぱいに降り注ぐ、大人からのメッセージ。

## 針葉樹の葉っぱを集めて 作ってみよう



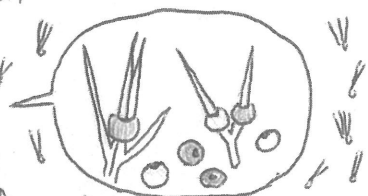
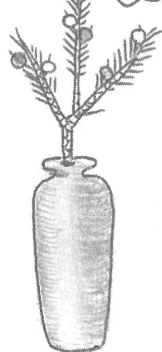
スギ、ヒノキ、モミ、ヒバ  
の葉を使って...  
型抜きをした紙粘土に  
葉っぱを配置して、やさしく指で  
押し当ててから、そっとはかすと  
葉っぱの模様がうつります。

ストローなどに穴を開け、  
ひもやリボンを通せば  
葉っぱ模様のオーナメントの  
完成です。



マツの葉を  
使って...

マツの葉にビーズを挿して、ビンや  
紙粘土を詰めたペーパーボウルに  
飾るとおしゃれなインテリアに♪



ビーズは取外しができるので  
クリスマスとお正月でそれぞれ  
色を変えて楽しむこともできます。

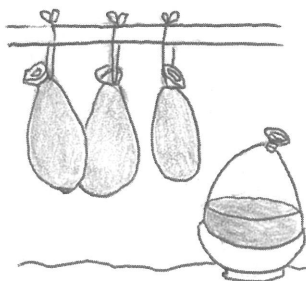
中村紘子 (なかむら ひろこ)

元小学校図工科講師。

木育インストラクター、保育ナチュラリストとして千葉  
で活動中。

# 冬のお庭でわくわく! 氷遊び

寒さが身にしみる冬の朝。  
子どもたちが園庭に張った氷を見つけてくる  
ようになったら、今年の氷遊びの始まりです。  
いろいろな形の容器を使ったり、水と一緒に  
お花や葉っぱを入れて おいたり…。  
氷になるまで待つ時間もまた楽しいひとときです。



風船を使ってできる氷も鬼力的です。  
空気を入れる割合を変えてみたり、  
中心部分はあえて水のままとしてみたり。  
いろいろ言式してみると発見もたくさん!

風船を割って中の氷を  
取り出す瞬間は  
子どもたちの目も  
輝きます。



作った氷をお皿の上に並べて、  
裁糸逢糸を垂らし、糸と氷が  
角合っているところに塩をひとつまみ。  
ゆっくり10秒数えてみると、  
あら不思議!! 氷が糸で  
持ち上がります。子どもたちの  
アイデア次第で遊びが  
どんどん広がります。

- こどもの図書館, Vol.51 No.9, 8, 児童図書館研究会.
- 清家 正彦 (1991)『特集・ふだんって図書館の自由 絵本「ちびくろサンボ」をどう取り扱うか -世田谷区立図書館の取り組みの中から-』みんなの図書館, 164, 35-41, 図書館問題研究会.
- 辰巳 義幸 (1974)『絵本リスト作業の中間報告』こどもの図書館, Vol.21 No.1, 6-7, 児童図書館研究会.
- 辰巳 義幸 (1974)『絵本リスト作業の経過と問題点』こどもの図書館, Vol.21 No.6, 1-3, 児童図書館研究会.
- 辻 和代 (2004)『特集 赤ちゃんと絵本 ブックスタートその後』こどもの図書館, Vol.51 No.9, 6-7, 児童図書館研究会.
- 図書館問題研究会 図書館用語委員会 (編) (1982)『図書館用語辞典』角川書店.
- 図書館問題研究会 常任委員会 (1977)『ピノキオに関する資料集③』こどもの図書館, Vol.24 No.2, 24-26, 児童図書館研究会.
- 図書館問題研究会・常任委員会 (1979)『調査報告・名古屋市図書館における「ピノキオ」の検討』みんなの図書館, 28, 2-13, 図書館問題研究会.
- 土橋 悦子 (1981)『実践報告 絵本箱・間仕切りお話し室etc』こどもの図書館, Vol.28 No.10, 14, 児童図書館研究会.
- 中島 啓子 (1989)『特集・「ちびくろ・さんぽ」学習会報告「ちびくろ・さんぽ」学習会に参加して』子どもの本棚, Vol.36 No.4, 8-9, 明治図書出版.
- 日本図書館協会 (1974)『図書館の自由に関する宣言』, 日本図書館協会HP.  
<<http://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/232/Default.aspx> 2017/1/12>
- 日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会 関東地区小委員会 (編) (1990)『「ちびくろサンボ」問題を考える シンポジウム記録』, 日本図書館協会.
- 林 佐和子 (2011)『公共図書館児童サービスとユニバーサルデザイン絵本』静岡文化芸術大学研究紀要, 12, 59-66.
- 林 佐和子 (2015)『図書館資料としての布の絵本』静岡文化芸術大学研究紀要, 16, 71-78.
- 早瀬 伸子 (1987)『障害児の遊具としての布の絵本: 障害児の文化的側面へ福祉活動を続けるふきのとう文庫の活動の結実として』情緒障害教育研究紀要, 6, 85-92.
- 平湯 文夫 (1999)『図書館員のためのステップアップ専門講座 第25回 児童室を家具とレイアウトで生かえらせる その1 -まず、中心となる絵本架の研究から-』図書館雑誌, Vol.93 No.12, 1001-1003, 日本図書館協会.
- 間崎 ルリ子 (1981)『絵本とは? そして絵本のリストとは?』こどもの図書館, Vol.28 No.7, 3-4, 児童図書館研究会.
- 松岡 享子 (2015)『子どもと本』岩波新書.
- 松本 なお子 (1981)『「困ったブックリスト」に思う』こどもの図書館, Vol.28 No.7, 児童図書館協会.
- 八木 信子 (1974)『「さわる絵本」を訪ねて』こどもの図書館, Vol.21 No.7, 7-8, 児童図書館研究会.
- 吉田 昭 (2004)『ブックスタートの贈りもの』図書館雑誌, Vol.98 No.9, 685-687, 日本図書館協会.
- 渡辺 順子 (2001)『文庫と「ブックスタート」~本のひととき・赤ちゃんといっしょ~』こどもの図書館, Vol.48 No.2, 2-3, 児童図書館研究会.

- 絵本学会機関誌編集委員会（編）（2015）『絵本BOOK END 特集1 赤ちゃん絵本とブックスタート』 絵本学会。
- NPOブックスタート（編）（2012）『赤ちゃん絵本を開いたら ブックスタートはじまりの10年』 岩波書店。
- 大西 登貴子（1987）『特集・絵本の配架 絵本をおいしくならべたい』 こどもの図書館, Vol.34 No.11, 8-10, 児童図書館研究会。
- 小木曾 真（1989）『児童文化時評 「ピノキオ問題」と「ちびくろサンボ問題」』 こどもの図書館, Vol.36 No.4, 16-17, 児童図書館研究会。
- 加藤千代子・望月梨枝子（1977）『特集 地域と子どもと図書館 盲児のためのさわる絵本づくりー品川区・むつき会の活動ー』 日刊社会教育, No.242, 44-49, 国土社。
- 川上 博幸（1981）『特集・新版えほんのもくろく 編集にたずさわって』 こどもの図書館, Vol.28 No.8, 2-4, 児童図書館研究会。
- 関西館図書館協力課（編）（2015）『特集「国立国会図書館と障害者サービス」』『てんやぐ絵本ふれあい文庫』30年の取り組み ～てんやぐ絵本のこと、そして、図書館に望むこと、国立国会図書館月報。  
<<http://www.ndl.go.jp/jp/library/supportvisual/geppo201501/index.html> 2017/1/12>
- 金 智紘（2006）『どのように視覚障害者は読書環境を獲得してきたのかー点字図書館、公立図書館、読書権運動の関係を中心としてー』 京都大学大学院教育学研究科紀要, 52, 108-121。
- 國松 恵子（2005）『特集：お悩み解決！新人図書館員 絵本編』 こどもの図書館, Vol.52 No.6, 5, 児童図書館研究会。
- 小西 萬知子（1988）『ひと 岩田美津子さんと点訳絵本』 みんなの図書館, 130, 68-70, 図書館問題研究会。
- 小西 萬知子（1991）『特集・障害者サービスを考える さわる絵本 点訳絵本との出会い』 こどもの図書館, Vol.38 No.6, 7-8, 児童図書館研究会。
- 小林 秀樹（1989）『特集・「ちびくろ・さんぼ」学習会報告「ちびくろ・さんぼ」問題を考える』 子どもの本棚, Vol.36 No.4, 10-13, 明治図書出版。
- 小前 恭則（1987）『特集・絵本の配架 自館にふさわしい配架を！ー小名木良一氏に依えてー』 こどもの図書館, Vol.34 No.11, 6-8, 児童図書館研究会。
- 近藤 洋子（1977）『ピノキオ問題の経過』 こどもの図書館, Vol.24 No.2, 3-5, 児童図書館研究会。
- 阪谷 孝一（1979）『特集・差別問題にとりくむ名古屋市図書館からのレポート レポート①ピノキオ・コーナーの開設とその利用状況』 みんなの図書館, 21, 4-11, 図書館問題研究会。
- 佐藤 いずみ（2001）『ブックスタートのその後』 こどもの図書館, Vol.48 No.10, 2-3, 児童図書館研究会。
- 沢谷 とし子（1983）『ちょっとひとくふう 走る絵本ばこ』 みんなの図書館, 72, 36-37, 図書館問題研究会。
- 澤田 みな（2001）『ひろば 島根県斐川町におけるブックスタートの取り組み』 こどもの図書館, Vol.48 No.10, 1, 児童図書館研究会。
- 清水 達郎（1981）『＜参照＞ 困ったブックリスト』 こどもの図書館, Vol.28 No.7, 2-3, 児童図書館研究会。
- 下貞 美穂（2004）『特集 赤ちゃん絵本 ブックスタート事業ー水巻町のその後ー』

### ③絵本を通しての人とのつながりを育む場や機会をつくる

おはなし会の参加により、親が我が子の成長を感じたり、絵本を心から子どもたちに読みたい思いへとつながったりしている。また「特別な支援を必要とする子どもたちの取り組み」では、図書館員や母親、ボランティアの人たちが支援の有無に関わらず絵本を通して同じ世界を共有できるよう活動が続けていた。さらにブックスタートでは絵本を読むことが親と子のふれあいの機会として考えられていた。このように、図書館員は絵本そのものだけでなく、絵本を通して人とのつながりを育む場や機会を提供しているのである。

### ④子どもとの関わりの中でつくりあげていくこと

図書館では多くの子どもたちに門戸が開かれている。これは図書館の自由に関する宣言や「ピノキオ・ちびくろサンボ問題」での図書館員の考えからも読み取れる。図書館では、蔵書する絵本の内容や配架方法等は図書館員によって決められこそすれ、その決定の根幹にあるのは利用する子どもたちの求めである。図書館員はいつでもその目と耳で多くの子どもたちのサインを受け取り、その思いの還元に努めている。

## 結論・課題

図書館員は読者（子ども）が求めるものは何かを考え、それを読者との関わりの中で見つけようとしていた。松岡（2015）が述べていたように、求めとは顕在的なものに限らず、子どもたち自身も気がつかない潜在的なものも含まれる。このような思いをもつ図書館員の何十年とわたる活動が「子どもと絵本の出会い」を豊かなものに行っているのだろう。今回は主に雑誌記事から検討した。しかし図書館員の取り組みは雑誌からだけでなく、書籍、特にインタビュー調査は実際の思いに対して深く関わることができる。今後は方法論に関しても丁寧に見直した上で研究を進めたい。

## 文献

- 伊藤 千代子（1981）『特集・新版えほんのもくろく「困ったブックリスト」を読んで』こどもの図書館, Vol.28 No.8, 5-6, 児童図書館研究会。  
井上 靖代（2005）『特別寄稿「ちびくろさんぼ」問題をふりかえる』こどもの図書館, Vol.52 No.10, 8-11, 児童図書館研究会。  
岩田 美津子（2010）『点字つき絵本の普及を願って』こどもの図書館, Vol.57 No.11, 1, 児童図書館研究会。  
植田 たい子（1977）『ひろば ピノキオ回収に思う』こどもの図書館, Vol.24 No.2, 1-2, 児童図書館研究会。  
植田 たい子（1990）『心をこめて読んであげたい - 日本橋図書館の乳幼児サービス -』こどもの図書館, Vol.37 No.6 12-13, 児童図書館研究会。



であること、住民が連携の一翼を担うこと、そして教育的意味や読書推進としての枠を超え、心に残る幸せや記憶としての活動という思いも加えた。

## ②ブックスタートの活動機会

英国で行われていた乳幼児健康診査での活動を試みた。健診は日本でも全国各地で実施されているからだ。例えば実際に親の前でブックバックに入っている絵本を読み、赤ちゃんの反応を親と共に見守り、Share booksを体感してもらう。ブックスタートは全国統一の正しいモデルがあるわけではなく、各々の地域でのこれまでの活動とも結びつけながら工夫と試行錯誤を重ねている。

## ③用意された絵本を無償配付するブックスタートへの懸念

吉田（2004）はブックスタートの絵本配付が目的から手段に転じつつある実情を危険視している。吉田が勤める図書館では絵本配付ではなく、リストの作成や講座の開催を行っている。それは予算、理念、ニーズ面からである。予算面とは、絵本配付の費用に財政難の自治体の予算をあてることへの懸念である。次の理念面は、図書館が用意した絵本を配付することへの疑問である。それは図書館の基本的な立場が、利用者自らの意思で資料を選ぶというものだからだ。最後のニーズ面とは、吉田の勤める市ではブックスタートを始めてほしいという要求が住民や市議会、教育委員会等からないという理由である。吉田の考えはブックスタートを行っている図書館員も意識しており、「単なる絵本プレゼント」とならないように注意を払いながら取り組んでいる。

## 児童図書館員が重視していること

### ①継続した絵本の理解

「新版 えほんのもくろく」作成で「絵本の概念をつかめていない」ことが問題視され、今後も論じていく必要性が述べられていた。その指摘から図書館員とは絵本の理解を重視すべきと考えていることが読み取れる。絵本の理解とは、概念をつかむことや、絵本出版状況、ブックガイドを書くにあたって必要な表現力や読解力という多様な内容も含まれてくる。また絵本は文学・芸術作品といった多くの側面をもつ。多様な種類、魅力をもつからこそ継続した絵本の理解が求められると考える。

### ②絵本との出会いの素地をつくる

ブックスタートの対象年齢は主に1歳前後である。つまり「絵本」を誰かと一緒に読む初期の段階に取り組まれている。おはなし会も同様である。絵本が豊富な図書館で親や図書館員と共に、「絵本」の存在を知り、またそこで楽しい、充実した経験が積み重ねられる。そして数年後成長した時に、今度は自分の足で本棚まで行き、読みたい絵本に手を伸ばすことができるようになるのだろう。

特集「国立国会図書館と障害者サービス」)。そして1987年5月30日付の新聞に彼女の訴えが取り上げられ大きな関心が集まり、1987年7月から点訳絵本は日本どこへでも無料で郵送できるようになった(小西,1988)。このように岩田を筆頭に図書館員やボランティアらによる点訳絵本の作成から始まり、普及のための郵送無料化への運動等、長年の働きを経て現在の広がりにつながっている。

## ②さわる絵本

さわる絵本作りの活動は品川区の点訳ボランティアグループ「むつき会」の働き掛けから始まった。品川区立図書館ではむつき会のメンバーと協力し、さわる絵本を製作、そして実際品川区立図書館でのさわる絵本の貸し出しを始めた(加藤ら,1977)。盲児をもつ母親たちやボランティアグループと共に、図書館でさわる絵本が普及していった。その後1990年代になると蔵書としては少しずつ広がってきたが、充分な利用の普及までには達していなかったようだ(小西,1991)。小西はこの現状を受けて「このことを克服するには、図書館がPRすることが大切です。」(p7)と、利用の普及に向けての図書館の取り組みの重要性を示していた。

## ③布の絵本

1973年に小樽市立病院内に開設されたふきのとう文庫が、組織的に初めて布の絵本の製作を始めた。この取り組みがメディアで取り上げられたことでボランティアの輪が広がり、次々と布の絵本が製作された。そして、これらの絵本は全国の障害児施設・学校に貸し出されていった。公立図書館での正確な貸出開始時期は分からないが、1980年には文京区立水道端図書館、1984年には練馬区立関町図書館で始まっている(林,2015)。練馬区立図書館では、さらに布の絵本製作講習会がほぼ毎年開催されている(林,2011)。

## (3) ブックスター

2000年は「子ども読書年」と称され、日本初の国立子ども図書館「国際子ども図書館」が開館した。子ども読書年推進会議は、読書年後も持続させたい思いからその後の具体的な取り組みを探していた。その時に、長期的に英国で取り組まれている「ブックスター」が着目されたのが、日本でのブックスター導入のきっかけであった。

## ①基本理念

「Read books ではなく、Share books」のきっかけをすべての赤ちゃんに届けるため公的な事業として行われること、実施者自らが充実させ発展させたい思いをもつこと、子ども一人一人と向き合う姿勢などを英国から学び、それを日本でも守っていこうと考えた。また日本社会に合わせて自治体の財源で行うこと、みんなのブックスター

利用する子どもたちとの関わりの中から方法を探るという意見が見られた（小前, 1987; 大西, 1987）。この考えは2005年にも同様のものが見られた（國松, 2005）。

#### （1）平置き<sup>4</sup>について

小前（1987）は重要な配架方法として「平置き」を挙げ、できるだけ絵本の表紙が見えるように工夫することを提言している。平湯（1999）、國松（2005）もその重要性を示している。さらに平湯（1999）は、平置きは立て差しとの組み合わせによって真価を発揮すると述べている。それは「平置きで1冊の本のとりこになった読者が、その1冊に導かれて類書へと関心が広がっていく」から（p1003）である。平置きと立て差しを組み合わせることで、さまざまな絵本に手を伸ばすことへとつながっていくようだ。

#### （2）ちょっとした工夫

絵本箱を用いた図書館もあった。例えば大阪の吹田市立図書館では、ベニヤ板を長方形の箱状（230mm×600mm×180mm）にし、脚にはキャスターを付け、表面には茶色の壁紙を全面に貼り、絵本の絵を貼ってブッカー（汚れ等防止用の接着透明フィルム）で覆った絵本箱を製作した（沢谷, 1983）。また、『ピーターラビット』などの小さな絵本を整理し、取り出しやすいように作った絵本箱もあった（土橋, 1981）。子どもたちが手に取りやすく、楽しさも味わえるような絵本箱製作という工夫がされていた。

### 4. 子どもと絵本を結びつける活動

#### （1）おはなし会

おはなし会はさまざまな図書館で行われている。例えば日本橋図書館の1990年当時の様子が『こどもの図書館』に掲載されていた。そこでは絵本の読み聞かせだけでなく、母親らと図書館員による絵本の勉強会も行っていた。勉強会への参加から絵本を子どもに読みたい気持ちの高まりや母親同士の交流につながっていった（植田, 1990）。

#### （2）特別な支援を必要とする子どもへの取り組み

##### ①点訳絵本

点訳絵本は全盲の母親である岩田美津子が「我が子と絵本を楽しみたい」思いから友人たちと共に考案した（岩田, 2010）。図書館との取り組みは、岩田が1歳半になる長男を連れて大阪市立の図書館に勤める小西の下へ訪れた時から始まった。1984年頃から友人の勧めもあり「てんやく絵本ふれあい文庫」の前身である岩田文庫を創設し、貸し出すようになった。しかし点訳絵本の普及に重要な郵送料金問題で壁にぶつかる。それは、点訳絵本は見える人も楽しめるため、盲人用郵便物にはならないという問題だ。岩田は郵送料無料に向けて地道に活動をした（国立国会図書館月報2015年1月号）。

---

4 書店や図書館などで本の表紙を上にして台に積み上げて陳列する置き方。

では「ちびくろサンボ」を残したいという意見や、まだ図書館として検討できていない、そもそもどのように考えていいのかわからないといった率直な考えなど多様な意見が交わされた（中島,1989）。

### ③公立図書館におけるちびくろサンボ問題の対応

1988年度の区立図書館長会において世田谷区立図書館では「ちびくろサンボ」の扱いについて問題提起し、翌1989年度には児童室担当職員研修会（以下 児職研）で検討した。検討は、89年度に主に作品評価について、翌90年度は作品評価が明確ではなかったが、前年度の作品評価を参考としつつ図書館での取り扱いについて議論を進めた。1991年1月発行の『みんなの図書館』では、児職研で「ちびくろサンボ」の扱いについてのたたき台として採用された素案について述べられている。

素案では図書館資料に対する図書館の基本的立場を踏まえ、基本的機能から検討している。基本的立場とは、①資料の内容に責任を負わない、②資料の内容に判断を加えず、公平に扱う、③いかなる立場にも立たない、である。児職研では図書館の基本的機能を資料の「提供」と「収集」に分けている。

「提供」とは求められた資料を提供することであり、資料の差別性と資料提供は別と捉える。ただ、提供と同時に人権擁護も重要となる。この点について児職研は、「ちびくろサンボ」は特定の個人や民族・人種に対し、明白で著しい不利益や不名誉をもたらしているとは考えにくいと述べている。

次に「収集」についてである。収集の判断として、住民要求に適合しているか、図書館が住民に例示する資料として適当か、蔵書全体として特定の立場に偏らないかという点を用いる。その点から差別性と資料収集は別問題と考えられる。これより「ちびくろサンボ」の取り扱いに関して少なくとも「差別性」を理由に「収集不適」ということはできないという見解を示している（清家,1991）。

しかしその一方で、京都市図書館では廃棄処分したり、現物はあっても閉架に置き、目録から削除するという対応を行ったり、児童書架から成人書架へと移管した図書館（豊中市や日野市）もあった（井上,2005）。

## 3. 絵本の配架

限られたスペースで子どもたちが探しやすい、読みたくなるような配架の工夫について取り上げる。

絵本を配架する際には、まず大まかな区分（幼い子向けの絵本、昔話・民話、知識絵本等といった年齢や絵本の内容で区切るもの）を行った上で、区分の配列（二次配列）を考える（大西,1987；小前,1987）。

二次配列には書名順、画家・著者順、出版社順が主な方法としてある。配列について議論がある中で、「本と子どもを結びつける」ことを目標とし、そのために自館を

差別性を感じないという意見や、親が説明して読ませればよい、さらに、障害者差別の問題を考える図書として活かす、という意見も出された（阪谷,1979）。

### ②-3 「ピノキオ」児童書架へ戻る

1979年10月1日に「ピノキオ」は児童室に戻された。その際公表した見解は、「百年前に書かれた童話『ピノキオ』は、現代の目で見直せば問題になる表現・内容をもって」いるが、『ピノキオ』による障害者の人権侵害や子どもの差別意識の助長を解明することは困難であり、差別図書と断定できない、と述べ、さらに、「差別助長のおそれがないとはいきれないという理由で資料提供をやめることは、市民の知る権利を保障するという図書館の責任を放棄すること」になるためだと発表している（小木曾,1989）。

## （2）ちびくろサンボ問題

### ①問題の発端

ちびくろサンボ問題とは、1988年7月22日付の米ワシントンポスト紙が日本の黒人キャラクター商品が人種差別につながるものとして批判したことがきっかけで起こった。加えて政治家による黒人への差別発言が火に油を注ぐこととなった。その結果、絵本『ちびくろサンボ』の絶版が相次いだ。このことを受け、図書館として「ちびくろサンボ」の扱い方を考えることとなった（小林,1989；日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会 関東地区小委員会,1990）。

### ②ちびくろサンボ問題についての議論

#### ②-1 ちびくろサンボ問題を考えるシンポジウム

1989年4月27日、図書館の自由に関する調査委員会関東地区小委員会の主催により東京都立中央図書館でちびくろサンボ問題を考えるシンポジウムが開かれた。そこでは図書館情報大学副学長の竹内愼、文庫代表の関日奈子、目黒区立図書館の松岡玲子を講師に意見が交わされた。図書館の対応に関して竹内は、国内外数多く出版されている「ちびくろサンボ」を積極的に収集すべきだと述べ、それらを比較検討する中でこの絵本のことや民族の一つとして、日本人についても考えていきたいと述べている。また松岡は、問題の資料を書架から除くのではなく利用者と共に考え、学んでいけるように資料提供を図ることが図書館の基本姿勢だと述べている。

#### ②-2 ちびくろサンボ学習会

1989年2月6日に品川区立大崎図書館でちびくろサンボの学習会が行われた。学習会では資料紹介を兼ねた経過説明と、「サンボ」という言葉の語源、黒人差別の歴史、賛否両論の比較等について発表された後、問題をどう考えるのか討議を行った。討議

果たすために、主に①資料収集の自由を有する、②資料提供の自由を有する、③利用者の秘密を守る、④すべての検閲に反対する、そして図書館の自由が侵されるとき、われわれは団結してあくまで自由を守る、ことを確認し、実践すると述べられている。

## (1) ピノキオ問題

### ①問題の発端

ピノキオ問題とは、名古屋の一読者が小学館発行の『ピノキオ<sup>3</sup>』を2歳半の子どもに読み聞かせていて、文章の表現や挿絵が障害者差別だと問題視したことから始まった。その後“「障害者」差別の出版物を許さない まず「ピノキオ」を洗う会”(以下洗う会)が結成され、小学館及び「ピノキオ」を出版している出版社に対して回収を求め、抗議をした。その結果小学館は当時出版していた全5種のうち、新しい出版の“国際版”を除いた4種の回収に応じた。しかしこれに不満を表した“洗う会”は「『障害者』差別の童話『ピノキオ』の全面回収を求める」アピールを発表した(1976年11月26日)。そしてアピールが発表された翌日に新聞報道がされた(植田,1977; 近藤,1977; 小木曾,1989)。

### ②公立図書館におけるピノキオ問題の対応

#### ②-1 図書館の声明発表までの流れ

報道の日に名古屋市図書館では、中央館から各館へ「ピノキオ」の本を回収し貸出・閲覧を見合わせ、扱いを検討する指示を出した。しかしこの対応が問題視され、「ピノキオ」の差別性のみならず、「図書館の自由」についても議論されることとなった。図書館問題研究会による討議の結果、1976年12月12日に常任委員会の見解として「古典的なよみもの『ピノキオ』を差別図書として回収を求めるアピールに反対する声明」を発表した。声明ではアピールについて、「『図書館の自由』を守り発展させようとしているわれわれにとって、この『アピール』は逆に自由をおびやかすものであり、その主旨を承服するわけにはゆかない」と述べている。声明は発表したが、その後多くの場で議論を続けること等で議論の輪が広がった。

#### ②-2 ピノキオコーナーの開設

名古屋市図書館では1978年10月1日より全館(中央館、分館14、巡回文庫4、移動図書館1、移動図書館は12月1日より)で「ピノキオコーナー」(以下 コーナー)を開設した。コーナー設置の他、利用者、障害者各々との懇談会、職員研修も実施した。コーナーで実施したアンケート結果では、(回答人数42名 1978年10月30日現在)「差別意識を植えつけ、または助長する図書でない」が35名、「差別意識を植えつけ、または助長する図書」が5名であった。また、一部の差別性を認めるも全体的な内容は

3 扱われた一部が絵本であり、絵本として出版されていない「ピノキオ」もある。

結果によってつかめていくだろうと考えていた。しかし最終的に複数の図書館員による意見の類似点から判断し、決定した。そのため、今後も絵本の概念、絵本の評価について論じていくことが必要であると述べている。

## （２）「えほんのもくろく」の議論の発端

「えほんのもくろく」の議論とは、新聞記者清水達郎による、「えほんのもくろく」への批判（1981年5月12日）から始まった。記事には、清水が最近読んだ図書リストの中で「新版 えほんのもくろく」が最も理解しにくいと書かれていた。彼はその理由として、①56%がF社（福音館書店）の作品である、②約30点が絶版か品切れで購入できない、③厳選した割には類型的な作品が目立つ、④大きい分野を占めはじめた知識絵本を全面的に削除した、を挙げた（こどもの図書館 Vol.28 No.7）。

## （３）「えほんのもくろく」への批判記事に対する意見

記事に対し図書館員からは批判的な意見が寄せられた。以下、指摘別に見ていく。「56%がF社の作品」について間崎（1981）は、目録としてでなく出版状況として望ましくないと述べ、目録から外れた出版社（あるいは筆者）に対し結果への省察を求めている。2点目の「約30点が絶版か品切れで購入できない」については、消耗が激しい絵本の保存機能へつながること、除籍判断に役立つ（川上,1981）、さらに出版社への再版促進につながるという意見もあった（伊藤,1981）。3点目の「類型的な作品が目立つ」について伊藤（1981）は、物語の世界との関わりを深めていくためにも文学として構築された作品に接する必要があると述べている。4点目の「知識絵本を全面的に削除した」については、「知識絵本は自然科学系を中心に質・量ともに充実してきており、お話絵本（文学系絵本）とは同一に扱うべきでないという認識」より別に作ることにしたため、清水の指摘に対して、不用意だという意見が見られた（松本,1981）。

## 2. 図書館の自由 ピノキオ・ちびくろサンボ問題―

「ピノキオ・ちびくろサンボ問題」とは、児童文学作品である「ピノキオ」と「ちびくろサンボ」が“差別”を表した作品だという見方がなされたことから始まった。図書館は「図書館の自由」を採択した立場の中、この2冊の絵本を児童室に配架すべきか否かをめぐる議論が重ねられた。問題となった絵本について図書館員はどのように考え、扱ったのかを探っていく。まず「図書館の自由に関する宣言」の内容を述べた上で、問題の背景、図書館員の議論や対応についてまとめる。

図書館の自由に関する宣言（以下 宣言）とは日本図書館協会の綱領で、国民の知る自由を保障するためのものとして1954年に採択し1974年に改訂されて以降現在まで用いられている（日本図書館協会HP「図書館の自由に関する宣言」）。宣言では、図書館での重要な任務である「知る自由をもつ国民に、資料と施設を提供すること」を

# 公立図書館における児童図書館員の 絵本に関する取り組みについて

渡邊はづき\*

## 問題と目的

子どもたちには絵本とのさまざまな出会いがある。それは絵本の種類に限らず、どこで、誰と、どのように出会うかも含め多様な出会いが広がっている。絵本と出会う場所の一つである公立図書館（以下 図書館）では充実した取り組みが展開されている。例えば2000年より保健所と並んで中心となり、活動を広げているブックスタートがある。また絵本の読み聞かせやストーリーテリング、ブックリストの作成などもある。このような取り組みを実現した背景には児童図書館員<sup>1</sup>（以下 図書館員）の存在が大きい。そこで本論では、まずこれまで図書館員が携わった絵本の取り組みを述べていく。「絵本の取り組み」とは主に国立国会図書館サーチで「図書館×絵本」をキーワード検索した雑誌記事の中で、図書館法が制定された1950年から現在まで図書館員が関わった活動が書かれている内容である。記事をまとめた結果、『「えほんのもくろく」をめぐって』『図書館の自由—ピーノキオ・ちびくろサンボ問題—』『絵本の配架』『子どもと絵本を結びつける活動』の大きく4つに分類できた。これら絵本を通した取り組みから図書館員は何を重要と考えているかを考察していく。

## 児童図書館員の取り組み

### 1. 「えほんのもくろく」をめぐって

1981年出版のブックリスト「新版 えほんのもくろく<sup>2</sup>」についての議論に着目する。一般に図書館で作成したブックリストは、図書館員が選んだ本が掲載されており、利用者への資料相談の一助として用いられている。松岡（2015）は選書について、図書館で最も大事な役割であり、その基本は読者の顕在的・潜在的な要求に応えることだと述べている。特に子どもの選書は、子ども時代という短い期間に気に入った本を繰り返し読むため、さらに大事になってくるといふ。

#### （1）「えほんのもくろく」作成にあたって明らかとなった問題点

作成にあたっての一番の問題を辰巳（1974）は「絵本の概念がはっきりとつかめていないこと」と述べている。辰巳によると、始め、絵本の概念は図書館員による評価

---

\*（わたなべ はづき）お茶の水女子大学大学院前期課程学生

1 児童奉仕を中心的な業務とし、その教育を受けた図書館員。ただ今回は特に専門業務としてなくとも絵本に関する取り組みや議論に携わった図書館員を児童図書館員と定義づけることとする。  
2 児童図書館研究会の20周年記念事業の一つとして作成されたもので全307点の絵本について児童図書館研究会員によるブックガイドが添えてまとめられている。



# 『幼児の教育』 平成三十年 総目録

## ◇春号

幼稚園の園

保育の「根本考察」にチャレンジ！5  
保育者は変わるけど変わらない？  
・20代の保育者だった頃を振り返る  
・座談会「新年を迎えていたいこと  
・いたいこと」われら20代！」  
(一九七四年) から

「幼児の教育」ここが新しくなります。  
私の保育ノート「なりたいた自分になり  
たい」 佐々木麻美  
私の保育ノート 心が開かれるとき  
—あるクラスでの出会いから

西 隆太郎  
子ども園をつくる—文京区立お茶の水  
女子大学—子ども園の記録—vol.8  
保育を支える連携と同僚性—シフト  
勤務制を生かす工夫から—森永路子  
倉橋惣三との対話⑤「森の幼稚園」と  
いう理想—その3— 浜口順子

幼稚園の自然体験に寄り添って余語晶子  
幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼  
保連携型認定子ども園教育・保育要  
領の改訂(定)とこれからの保育  
松島のり子  
園文化をデザインする⑤ 春を見つけ  
る—いつものお庭や散歩道で—  
中村絃子

中国(蘭州、西寧、北京)の4幼児園  
を訪問して—ユニバーサルな保育は  
あるのか—  
浜口順子・小玉亮子・盧中潔

## ◇夏号

自分なり？

保育の「根本考察」にチャレンジ！6  
幼稚園教育要領が変わるとき、現場は？  
・幼稚園教育要領が変わるとき  
・現場の新しい幼稚園教育要領」  
(一九九〇年) から

私の保育ノート「遊べない三人組」  
—三歳の遊びのはじまり— 鈴木裕美  
実践ファイル いつものとは違う保育の  
場に身を置いて 中澤智子  
子ども園をつくるvol.9「夕方の保育」  
の可能性を探る

宮里曉美・田島大輔  
倉橋惣三との対話⑥ 幼児期の「二人  
一人」と社会性の成長について(1)  
—「二人」と社会性の成長について—  
ワージングママの子育てを振り返って  
宮井真千子  
夢のたねを見つける 松尾久美  
園文化をデザインする⑥ アウトドア  
気分を演出！ 中村絃子

韓国解放後から一九八〇年代までの幼  
児教育課程の発展過程—カリキュラ  
ム・モデルの開発と普及に着目して—  
林志妍

## ◇秋号

手を見る

保育の「根本考察」にチャレンジ！7  
親と保育者の関係性を考える  
・親と保育者が共に育つ  
・子ども・母親・保育者」  
(一九八五年) から

私の保育ノート「あの時」とつな  
がる「今」 灰谷知子  
実践ファイル 幼児の健やかな身体に  
向けた東京都文京区での取り組み  
・活発に運動する環境づくりから運  
動好きの子どもを増やす—  
水村(久慈) 真由美

子ども園をつくるvol.10 インクル  
シブな保育—それぞれらしい育ちの  
ために— 大藏みどり  
倉橋惣三との対話⑦ 幼児期の「二人  
一人」と社会性の成長について(2)  
子どもたちの間に立ち上がる「社会」  
浜口順子

藤崎安子  
見えない子どもたちがはじめて出会う  
絵本 攪上久子  
園文化をデザインする⑦ 小さな秋で  
お部屋を飾ろう！ 中村絃子  
保育環境としての「雨」に関する一考  
興柏佑

## ◇冬号

保育者の重ん

保育の「根本考察」にチャレンジ！8  
幼小接続期の子どもの保育者・教師  
・幼小接続期を考える  
・「幼児最初の学校生活」  
(一九三三年) から

私の保育ノート 保育の可視化がもた  
らす保護者の変容—あらためて感じ  
た、保護者と共に創りつくり保育と  
は？ 石井美和  
実践ファイル 世界O MEP創設七十  
周年の年に寄せて—第七十回プラハ  
大会報告— 土垣内伸子

子ども園をつくるvol.11 大学の中に  
山ができた！—出会いの中で物語  
が生まれる— 宮里曉美  
倉橋惣三との対話⑧ 幼児期の「二人  
一人」と社会性の成長について(3)  
梅干し、らっきょう漬けを若い世代へ  
どう伝えるか 近藤みゆき

絵本で考えるデス・エデュケーション  
園文化をデザインする⑧ 作ってみよ  
う、冬 葉っぱ・氷を使っ  
て 中村絃子  
公立図書館における児童図書館員の絵  
本に関する取り組みについて  
渡邊はづき

『幼児の教育』平成三十年 総目録



# ◇ナーサリーこぼれ話◇

## あたためたい ～乳児の足湯

気温がぐんぐん下がってきた冬のある日。散歩から戻った暖かく設えた保育室の中でも、ほしぐみのH（7か月）の足は冷たく白い。せっせと足先をさすったり温かいタオルで拭いてみたりするが、保育士の体温ほどにも温まらない。保育士のSさんが、その日も、その前日も前々日も、「これじゃあ赤ちゃんじゃなくて白ちゃんだよ……」とHの足の冷たさを嘆く。冷たい足先を温めたい一心で、足湯をやってみてはどうかと思い立つ。足を温めれば、全身の血行も良くなり、よく眠れるようになるかもしれないし、葉の塗布ではなかなか良くならないその子の皮膚疾患にも効くかもしれない。



かくして、午睡の前に、部屋のフローリング部分にバスタオルを敷き、お湯を張ったタライを置いて、まだ到底椅子に座れないHを膝に抱っこして、足をお湯につけさせた。お湯の中で、少しずつ足先が温まっていくのを感じる。そして、それに手を添える保育者の心身にも、温かさがじわーっと広がるのを感じる。次第に、Hだけでなく、ほしぐみの子どもが皆、足湯をするようになる。そして、降り積もった雪の中を遊んだ頃から、1、2歳にじくみでも足湯を楽しむようになった。温かいお湯に冷たい手足をつけると、からだの中の何かが溶けるのだろう、皆、ふにゃっと柔らかい、気の緩んだ表情になる。それが本当にいいとおしい。

（主任保育士K）



# ひろば

お便り

POST

## ◆私の「カルチャー・いんふお」◆

東京の東村山市に国立療養所があります。1909年に開所され、今もハンセン病の元患者たちが暮らしています。JR新秋津駅からバスに乗ると数分で道の左側にうっそうとした森が続きます。広大な敷地の一面には国立ハンセン病資料館があり、全国に12か所ある療養所に関するビデオが上映され、写真などの資料が展示されています。元患者による語り部の会も設けられ、長く「入所」という名で隔離を余儀なくされた人々への理解を進める活動が続いています。入所者の平均年齢は80歳を超え、中には10代の子ども時代に入所して、長い人生で子どもを持っていないなどの苦悩を重ねてきた人もいます。敷地内にある花さき保育園を歩いて森の外縁を歩きながら、道を一本隔てただけの療養所と一般の住宅地との距離を感じました。

『あん』（河瀬直美監督 2015年）はこの全生園を背景にした映画です。先に亡くなった女優樹木希林演じる元患者徳江が、永瀬正敏演じる千太郎が切り盛りするどら焼き屋どら春で“あん”を練る仕事をさせてほしいと頼むことから物語が始まります。家庭に居場所のない中学生が店で悩みを打ち明けたり、千太郎が過去に起こした事件での多額の借金、周囲の心ない差別偏見がドキュメンタリーのように物語をつくります。仕事から身を引き元の生活に戻った徳江を療養所に訪ねた千太郎は「あなたを守れなかった」と涙します。徳江は温かいぜんざいで彼と中学生をもてなし、自分の作ったあんでお客を喜ばせることができたと言います。満開の桜並木の根元にある小さなどら春が食べる人見る人の心を温め、社会の知られない部分に光を当てる優しい作品です。（AK）

## ◆研究論文を募集します◆

ピアレビュー（査読）の上、掲載します。

本誌の巻末、横書き部分の「探究」ページに掲載する論文を募集します。

【テーマ】子ども、保育、幼児教育に関するもの

【文字数等】400字詰め原稿用紙35枚程度。

（写真・図表、文献、注を含む）

本文はワード原稿で作成してください。編集上適宜対応しますが、投稿予定の方は下記のアドレスまでメールでご相談ください。

【締め切り】随時募集します。

【送付先】本誌編集委員会

Mail:youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

## ◆年間購読継続手続きのお願い◆

いつもご愛読くださり、ありがとうございます。

次号春号からの年間購読を引き続きご希望の方は、更新手続きが必要となります。フレール館のホームページに入り、オンラインショップ「ツバメノウチ」のバナーをクリック。その後、「定期購読」⇒「幼児の教育」の表紙絵をクリックします。

定期購読のサイクルは冬号で一区切りになります。ご不明の点などございましたら、youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp までお問い合わせください。

おかげさまで今年も無事に4号をお届けすることができました。今後ともどうぞお引き立てくださいますようお願い申し上げます。

（編集委員会）

## 編集後記

昨年の冬は関東でも積雪があり、雪遊びを楽しみました。「かまくらを作ろう」と張り切って雪を集めたものの、宵越しの雪はパラパラで「くっつかない」と困っていると、ジョーロの水をかける子どもが現れ、「水をかけるとくっつく!」ということで、その後は共同作業でかまくらが完成しました。本当に中に入れてうれしい姿が、「子どもの情景」の一枚です。『幼児の教育』が季刊になり丸8年になります。園生活の中で子どもたちが相談、協力しあう姿がこちらで見られますが、お茶の水女子大学内にある乳幼児三施設もさまざまに連携、本誌編集に参加し、知恵を出しあっています。乳幼児の生活では「つながり」がキーワードになると感じる事が多

いのですが、今号の特集＜アーカイブズ＞では、幼小連携に関する大正時代の文章を読み、語りあいました。旧仮名遣いの文章を読み解くのに苦労しつつも、今につながる大切なことは変わらずにあることを実感しながら話し合いが深まりました。ただ、当時の幼小連携の課題は、就園が当たり前になった現代では入園前後の接続として読み替えることができるのかもしれません。

座談会が予想を超えて盛り上がったため、後半は春号掲載になりました。冬から春へ、2019年も引き続き本誌をご購読の上、誌面への感想や意見をお寄せいただき、読み手の方々とつながりが、より強く、幅広くなれば幸いです。(KE)

## 次号予告 幼児の教育 春号 2019年4月刊行予定

新連載がスタートします。

- ◇ 保育の「根本考察」にチャレンジ! 9  
座談会「幼小接続期を考える(後編)」
- ◇ 歯科医ワーキングママの子育て 立花美和氏
- ◇ 新連載 保育をめぐるって考える ～ 幼稚園発 ～ お茶の水女子大学附属幼稚園

※タイトル内容が変更になる場合もあります。

## 幼児の教育 冬号 第118巻 第1号

平成31年1月1日発行  
編集発行人/浜口順子  
編集担当/田中恭子  
発行所/お茶の水女子大学  
『幼児の教育』編集委員会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学  
浜口順子研究室内  
youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

発売所/株式会社フレーベル館  
電話: 03-5395-6604 (編集)  
振替/00190-2-19640  
印刷所/図書印刷株式会社  
定価/本体880円+税  
◎お茶の水女子大学『幼児の教育』編集委員会  
2019 Printed in Japan 無断転載禁止  
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

編集委員/上坂元絵里  
菊地知子  
松島のリ子  
宮里咲美  
お茶大3園合同研究会  
(附属幼稚園、  
いずみナーサリー、  
文京区立お茶大こども園)  
編集協力/フレーベル館

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613 (営業) ●

## 保育ナビブック ※ 第8弾!

※保育ナビ（月刊保育誌）から生まれた新シリーズ  
保育現場で気になるテーマをしっかりと掘り下げます

幼稚園・保育所・認定こども園のための

## 法律ガイド

園と保育者の責任と対応は？ 子どもたちの健康や安全、保護者や地域との関係性、職員の労務管理について等、園にまつわる法律トラブルを列挙し、予防と対応の方法を解説します。

木元有香／著

(弁護士・鳥飼総合法律事務所)

全 80 ページ 26×18cm 定価 本体 1,800 円＋税

109-81 ISBN978-4-577-81450-5

## 42 の具体的な相談事例を Q & A 方式でわかりやすく解説します

## CONTENTS (一部抜粋)

## 第1章 知っておきたい法律の基本

弁護士に相談するのはどんな時？

園児の事故についての「法律」と「責任」

## 第2章 園で気になる法律の問題

安全・健康への配慮

危機管理・災害への対策

## 第3章 保護者への対応

保護者と園との契約関係

保護者からのクレーム

## 第4章 職員への対応

職員内でのハラスメントに関する対策

職員の不祥事への対応

## 第5章 地域とのかかわり

騒音の苦情への対応

建築、園庭の建物増築

幼稚園・保育所・認定こども園のための  
法律ガイド

木元有香 (弁護士・鳥飼総合法律事務所)

42の  
相談事例から  
考える園と保育者の責任と対応は？  
保育現場に詳しい弁護士が解説

## CONTENTS (一部抜粋)

## 第1章 知っておきたい法律の基本

弁護士に相談するのはどんな時？

園児の事故についての「法律」と「責任」

## 第2章 園で気になる法律の問題

安全・健康への配慮

危機管理・災害への対策

## 第3章 保護者への対応

保護者と園との契約関係

保護者からのクレーム

## 第4章 職員への対応

職員内でのハラスメントに関する対策

職員の不祥事への対応

## 第5章 地域とのかかわり

騒音の苦情への対応

建築、園庭の建物増築





# 〈新学習指導要領完全対応〉 〈小学校教育漢字 1026字〉

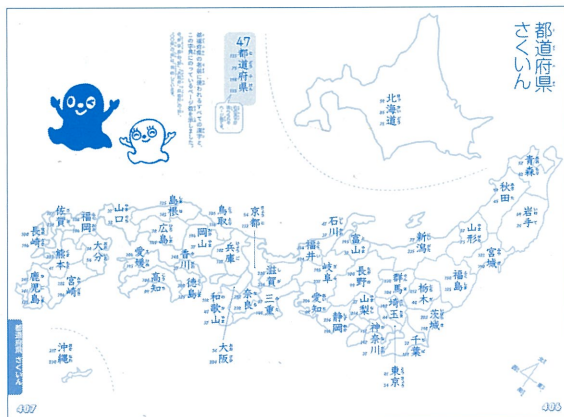
## はじめてつかう 漢字字典 第2版

村石昭三／監修  
首藤久義／編著  
坂崎千春、井上雪子／絵

子どもの生活や学習の中でよく使う言葉を選んで作られた漢字字典。幼児期から楽しく漢字に親しめるような工夫がいっぱいです。2020年から増える20字に対応。わかりやすい「都道府県さくいん」つきですべての都道府県名が漢字で学べます。



全 412 ページ 22×15cm  
定価 本体 1,000 円＋税  
303-60 ISBN978-4-577-81446-8



卒園祝い・入学祝い  
にもぴったり！  
小学生にも人気です。

### ポイント

- ①絵場面さくいん（巻頭 24 ページ分）  
読みや画数、部首を知らなくても絵から漢字を調べることができ、自分で字典を引く自信がつきます。
- ②オンくんあそび  
なりたちや音読みと訓読みを遊びながら覚えられます。

定価 本体八八〇円＋税

キンダーブックの **フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所  
または本社保育事業部 (03) 5395-6608 にお問い合わせください。